

# 歴史と主体 —— 中村丈夫研究

## 第1号（創刊号）

創刊に当たって●大石和雄

創刊への言葉●中村長哉

中村氏の日本国家論を読み返す●大石和雄

解題・「『中ソ論争』とイタリア共産党」●三森義道

アジア太平洋戦争の敗北の総括と  
旧日本軍隊論・試論（一）●茂呂秀宏

中村さん最晩年の諸事情と課題意識●前田浩志

対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育●黒沢惟昭

会則／参加よびかけ●莊司良樹

人間と権力——科学と芸術への提言●中村丈夫

年1回刊 研究誌

# 15年号

歴史と主体研究会

# 歴史と主体——中村丈夫研究

第1号(創刊号)

年1回刊研究誌 **15年号**

編集/発行 中村丈夫記念・歴史と主体研究会

## 目次

### 第I部 発足と創刊

創刊に当たって……………中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄  
 創刊への言葉……………中村長哉 3

### 第II部 研究論文

中村氏の日本国家論を読み直す——現在の日本国家の歴史主義的把握のために——  
 ……………大石和雄 4

解題・『中ソ論争』とイタリア共産党……………三森義道 8  
 アジア太平洋戦争の敗北の総括と旧日本軍隊論・試論(一)……………茂呂秀宏 12

中村さん最晩年の諸事情と課題意識……………前田浩志 17  
 特・別・寄・稿……………

対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育……………  
**読書紹介** ピーター・メイヨー著 里見実訳 『グラムシとフレイレ』を読む……………黒沢惟昭 23  
 (太郎次郎社エディタス、二〇一四年刊)

### 第III部 研究会よりのお知らせ

会則と参加よびかけ(二〇一五年九月一四日)……………荘司良樹 30  
**第IV部 遺稿覆刻の部**

『人間と権力』——科学と芸術への提言——……………中村丈夫 32  
 (一九六九年七月六日 於工学院大)

編集後記……………  
**〔広告〕** 『紙碑 中村丈夫』(二〇〇八年、彩流社刊)……………38

## 第I部 発足と創刊

### 創刊に当たって

中村丈夫記念・歴史と主体研究会

代表 大石和雄

「中村丈夫記念・歴史と主体研究会」会員の皆様、読者の皆様、ここに研究会の機関誌である『歴史と主体』創刊号が無事発刊できたことを心から喜びたいと存じます。また、創刊号に珠玉の原稿をお寄せいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

日本で「新左翼」が登場してから、約五〇年が経過します。今では誰もが新左翼といえば、六〇年代後半（六七年頃）からのベトナム反戦闘争や大学闘争さらには「七〇年安保」闘争を展開した、既成の左翼（共・社）から離脱した政治グループを想定しますが、しかし、それらすべての党派が当初から「新左翼」という呼び名を自称していたわけではありません。六〇年前後に共産党から分離した「共産同一」や「革共同」等は、自らを「革命的左翼」と称しており、「新左翼」とは自称していません（最近発行された『現代革命への挑戦』と題する革共同中核派の文書の「用語解説」でも、「新左翼」に関して「一九六〇年の安保闘争以後、従来の共産党、社会党を指していた『左翼』の限界を突破して登場した革命的左翼を、既成左翼と区別してマスコミが名付けた」と解説しています）。

当時から「新左翼」を自称していたのが、中村丈夫氏が率いる党派でした。その意味でも、中村氏こそは日本新左翼運動の生みの親、牽引車といつてよいでしょう。氏の言う「新左翼」とは、「新しいが故に革命的な、革命的なるが故に新しい」左翼というものでした。そのため、氏は真摯に「新しい」「革命的」理論を展開すべく奮闘してきました。もちろん、氏は学者でも、評論家でもなく実践家でありましたので、その氏の理論的展開はその一部が当時の左翼系雑誌に掲載されることはありませんでしたが、ほとんどが氏が所属する党派の機関紙・誌に限定されたものです。

新左翼登場後五〇年。今では、その影響力はなく、むしろ負の影響だけが巷ではまかりとおっています。新左翼を自称した党派も、すでに党派としては結束を解き、ほそぼそと新左翼運動の総括作業を行なっています。中村氏も二〇〇七年に八七歳で逝去されています。こうしたなかで、私たちは、この新左翼運動の生みの親、牽引車であった中村氏の理論を後世に残し、その検証と発展を図るべく、氏の遺稿集データベースを作成するとともに、研究会を発足させ、その機関誌として本誌を発行した次第です。

第三インター型共産主義運動が終焉し、それとともにマルクス主義的新左翼運動も崩壊した今日ですが、かといってこれに替わる社会変革運動の理論が新しく提出されているわけでもありません。そのような時、迂遠な途かもしれません、かつて中村氏が

提起しようとした「新しい」「革命的」な理論というものを改めて研究することが大事ではないでしょうか。少なくとも、新左翼運動を担った者としてはそう考えます。本誌は、その任務を担う媒体誌としての役割を果たしていきたいと思っております。皆様方の注目とご寄稿をお願いします。（二〇一五年八月三十一日）

### 創刊への言葉

中村長哉

「中村丈夫記念・歴史と主体研究会」の発足とともに、同会の会誌『歴史と主体』が創刊されることになった。研究会の目的・活動内容などについては、先月の同誌「創刊へのアピール」において大石和雄代表が明らかにされているとおりであります。私は、この機会に、中村丈夫の没後行なわれてきた集会や出版など数々の行事について、これを担われた方々にあらためてお礼を申し上げ、『歴史と主体』への期待を述べたいと思う。

兄、中村丈夫は、二〇〇七年四月三日、八七歳の生涯を閉じた。すでにこの年七月には「中村丈夫氏を偲ぶ会」が開催され、翌二〇〇八年に『紙碑 中村丈夫』の刊行があった。その後も相次ぐ「七回忌記念の集い」、「中村丈夫遺稿集データベース」完成と、この八年間に中村丈夫の革命運動に対する理論家・実践家としての活動を明らかにし、将来への指針とする試みは間断なく続けられてきた。これらの活動を推進され、参加された方々に対しては、まことに感謝の言葉もないといわねばならない。

このたびは、遺稿集（USBメモリ収録）の完成を機に、研究

会誌を刊行し、誌上において中村論稿の読み返し、自由な討論・感想を積み上げ、さらに会誌を軸とする懇話会を開催するということである。

私は、このたびの遺稿集データベースの一八項目にわたる成果に、一部ではあるが接して、故人がよくこれだけのものを残したと思った。また、たとえば「日本国家」「軍事」などの項目を通して、現在われわれの当面する問題を正面から論じている視点が確かさ、先見性に感銘を受けた。その一方で、晩年、病いに倒れて一〇年の療養生活を余儀なくされた彼の無念さを、いまさらながら思うのである。

しかし、現在の厳しい政治情勢の中で、彼と志を同じくする人々は、彼の諸論稿を読み直し、その方法や理論を明らかにし、考察の意義や到達段階、発展方向を考え、日本における変革運動とその主体の総括をしようとしている。故人は、自身が折々に書き記したものを公表することにはきわめて慎重だったと聞いているが、今回のことには、さぞ心強く思うにちがいない。

代表が述べておられるように、研究会の構成メンバーのほとんどは、六〇年代後半から登場した全国の大学闘争・全共闘運動を担った人々である。私は老骨であるが、これらの方々もいまや決して若くはない。年一回の会誌の発行、懇話会の開催は妥当と考える。

私は、『歴史と主体』の創刊と充実に期待し、自分自身は会員の方々との交流と活動参加を通じて自身の過去を顧み、新しい生き方を学んでいきたいと思う。

## 中村氏の日本国家論を読み直す

——現在の日本国家の歴史主義的把握のために——

大石 和雄

現在、安倍政権による集団的自衛権を容認する「安保法制」をめぐって、最近にしてはかつてない議論が起きている。が、それにしては論点は依然として「違憲」論的視点でしかなく、安倍政権によるこうした政策が、日本国家のあり方をめぐるどのような歴史的变化であるのかという理論的分析についてはほとんど展開されていないようである。その背景には、七〇年以降の新左翼運動の挫折による左翼運動の崩壊という現実がある。理論的には、マルクス主義の行き詰まりによる日本国家論——その歴史主義的解明という作業の不在である。

こうしたなかで、故中村丈夫氏の日本国家の歴史主義的分析の論は貴重であり、その読み直しは今でも有効であると思われる。遺稿集(データベース)には、「4 日本国家」と題する章に「三本の論稿があり、またこれを補完する論稿として、「日本マルクス主義思想の特質」が「9 共産主義運動史」の章にある。ここでは、明治維新以来の日本国家をどう捉え、そこでのマルクス主義思想の問題をどう捉えるかという観点から、若干の紹介をした。

「という題名通りグラムシの土台と上部諸構造との歴史的に独特なブロックの論に依拠しての「歴史的ブロックとしての日本国家分析」である。その問題意識はひとこと言えば、かかる「歴史的ブロックとしての日本国家を根底的に転覆するためのヘゲモニーの戦略とその主体たるヘゲモニー装置を構築すること」にある。強調されているのは「歴史主義」と「主体の形成」ということである。日本国家分析に際しての、かかる「方法」と「問題意識」の意義こそが重要であるが、これまたここではこれ以上述べることができない。

ここでは、「日本国家論への一視点」での中村氏の七九年時点での日本国家の歴史主義的規定の結論箇所を紹介しておく。

「われわれはこんにち、日本国家はいわば『初期国家資本主義』をもってする資本主義的発展の開始——のちのケマル主義、ペロン主義、ナセル主義などの系譜の先蹤——このかた、特に自由民権運動の『トラスフォルミズモ』||明治憲法体制このかた、本質的にはブルジョア国家||民族国家であり、それが絶対主義、ボナパルティズム、ファシズムの機能行使しつつも西欧的な意味での絶対主義、ボナパルティズム、ファシズムには単純還元できない反動カエサル主義的特質をそなえてきた点をこそ、重視しなくてはならないであろう。言うならば、歴史のカテゴリーとしての『天皇制』民族国家であり、『天皇制』帝国主義である。この独自に強烈な民族国家は、『天皇制』の統治形態が消滅しても失われることなく、むしろ戦後『平和と民主主義』下に一面では肥大化し、システム化さえしている」

ここでは、戦前以来の日本の「独自に強烈な民族国家」ぶりは、

### 中村氏の日本国家分析の方法と問題意識

「日本国家」の章にある「歴史的ブロックとしての日本国家分析の方法」(七二年)と「日本国家論への一視点」(七九年)には、戦前以来の主として講座派系また「テーゼ論争」的日本国家把握批判の上に、氏の把握が展開されている(後者は、前者を継承し発展させたもの。重複した部分が多くある)。また、「近代日本におけるヘゲモニーをめぐって」(九二年)は、ある研究会での天皇制に関する報告を受けてのコメントであり、こちらは、そのような日本国家を形成せしめた人民運動のヘゲモニー的限界を分析したものである。

これらの内容を詳しく紹介する余裕はないが、これまで「テーゼ論争」等で焦点になってきた、明治維新とその後の日本国家の国家論的規定をめぐるマルクス主義的諸論を取り上げ、それへの逐一的批判を展開している。現在では、新左翼においても「バック・ナンバー」になってしまっている論議である。その具体的内容は直接遺稿集に当たっていただくとし、ここでは氏の方法及問題意識だけ強調しておく。方法は、「歴史ブロックとしての

「むしろ戦後『平和と民主主義』下に一面では肥大化、システム化している」との把握の意味が重要といえよう。

### 日本近代政治史への問題提起

次に、かかる日本国家を形成せしめている主体的要因として、ヘゲモニーの戦略とその主体形成に関して氏が、明治維新以来の政治史的な振り返りに対して問題点として提起しているところを示してみたい。それは、「近代日本におけるヘゲモニーをめぐって」の論稿で述べられている。おそらく天皇制研究で有名な伊藤晃氏の報告に対するコメントであろうが、そこでは伊藤氏は一九二〇〜三〇年にかけて天皇制が大きく転換し、いわば市民社会に浸透してきたことを分析し、こうした動向を把握して対決できなかったことが、戦後においても天皇制との対決における日本人民の受動性となっているという趣旨の提起をしたものと思われる。

これをうけて氏は、とりあえずこれを肯定しつつも「日本の反体制運動のデイスヘゲモニー的原型というべきものが、既に大きな比重を占めると考える」とし、より根源的な諸問題を提示する。それは、一つは明治維新以来の多くの人民的運動でのヘゲモニーの学びなおしと、第二にはこうした運動の展開、所為を根底的に規定してきた思想方法の批判の精密化ということであり、そこで疑点を示す。第一では次の疑点である。

① 維新政権は改装徳川政権よりも、そして大久保のカエサル主義は西郷のカエサル主義よりも「進歩的」といえるのか? 人民にとつては最悪の選択となったのではないか? また、そこでの、列強による「植民地化の危機」なるもの

はどこまで現実的か？

② 「士族—豪農民権」の吸収と「困民民権」の粉砕とは、民族的—資本主義的統一を完成させた。後者は「殖産興業国家と対決するに至った前期プロレタリアート主体の反資本・反国家闘争—社会的平等主義」まで要求したが、それはすでに、大井憲太郎ら「民権—国権」的右派とも訣別したジャコバン左派であり、歴史のカテゴリ—としての自由民権運動を超越するものではないか？ が、この左派にしても、「琉球処分」への抵抗が植木枝盛しか見出せないのなぜか？

③ ジャコバン左派の伝統は明治社会主義のなかでは、辛うじて幸徳秋水に継承され、幸徳は欧米社会主義に影響され、絶対自由主義・絶対平和主義をラジカルな変革思想に仕上げた。この幸徳の直接行動主義は、労働運動との結合に機会は得なかったが、片山潜の職能組合主義—天皇制的議会万能主義を圧していたのではないか？ 幸徳をアナキストとし、片山をコミニストとするのは根本的に誤りではないか？

④ 第一次大戦を契機とする労働運動の高揚のもとでも、友愛会以降の自然成長性を革命的階級意識に媒介したのは幸徳系である。そのなかでも、「ボルシェヴィズム」を主導した山川均よりも、運動に密着したのはアナルコサンジカリズムの大杉栄ではなかったか？ さらに、「アナ・ボル論争」で勝利したのは、実は「アナ」ではなかったか？

⑤ これをくくると、「民権—国権」と、「労働運動と社会主義裏から（日本人民運動のデイスヘゲモニー性の問題として）——それが常識的歴史理解となっている理論的・思想的問題性と関連させて——捉えようとしたものもある。

その点では、中村氏が「日本国家論への一視点」で書いているように、これらは「日本国家論の当然の構成要素たる未分明の政治学的分野」であろう。このようなことを今頃分かって遅いともいえようが、次の世代の者への伝達としては重要といえる。現在、日本史教科書問題が大きな焦点になつてもいるので、そこにおける近代史の検討において、中村氏の提起した諸々の「疑点」をうけた議論が深まればと思つている。また、沖縄問題も大きな政治的焦点になつているが、実はこれも明治国家成立時以来からの課題であり、その根本的視点の不確立が、当時、「琉球処分」への抵抗が左派においても、植木枝盛にしか見られなかった（沖縄の独立ないしは連邦制国家）ことにつながるという認識も、現在の沖縄人民の闘いへの日本人民の連帯において極めて重要といえよう。

さて、再度現在の時局にもどつて考えてみると、安倍らの「戦後レジームからの脱却」は、国際的には国連安保理常任理事国をめざしての「普通の国家」づくり、国内的には明治国家的な国家像への郷愁ともいえよう。これに対するリベラル側は「戦後憲法的国家像であろう。その代表はアキヒト天皇である。しかし、これは何か日本国家への本質的な対立となるであろうか？ むしろ、筆者には中村氏が日本左翼の負の伝統として指摘してきた「三二テーゼ」的発想、「ナシヨナリズム」と「意識的・無意識的民主

との不結合」は、早くから思想的原型として固化され、この民族国家主義的統合力への屈従は日本共産主義運動の体質においてすら反復再出し、（コミンテルンの影響は大きいとしても）「二段革命」志向—社会主義革命の回避が伝統化され、支配民族意識による日本の多民族国家性の否認—社会排外主義への偏畸を定着させた、と考えられないか？

そのうえで、日本マルクス主義思想については、次のように述べる。コミンテルンの権威をつうじてのブーリン主義の機械的決定論にたいし、ディーツゲン—オランダ左派に依拠しかつた山川均も、コルシユ、ルカーチに依拠しかつた福本和夫も、二七テーゼで政治的に断罪されてからは積極的寄与を蒸発させられ、以後、講座派はスターリン主義にゆきつき、労働派は新カント主義をひきずるしかなかった。それにたいし、西田現象学から出て、それをもあれ超えた三木清の存在論的な「人間学的マルクス主義」と、戸坂潤の認識論的な「合理主義的マルクス主義」の寄与は貴重であつたが、運動からは無視され、戦後の形骸化、風化を招いたのではないか？（なお、この部分をより詳しく展開しているのが「日本マルクス主義思想の特質」（八二年）である）

### 「三二テーゼ」的発想を越えるために

以上、やや長々と紹介したが、中村氏のこの提起は、一つには伊藤氏の天皇制問題にひきつけすぎた「日本人民運動の受動性」という捉え方への暗黙の批判であるが、それは同時に中村氏が前記の二本の論稿で展開した明治維新以来の日本国家の特異性を、

主義郷愁」の繰り返しではないか、という疑念を拭い去ることができない。その辺について、上記中村氏の提起を基に、今日の日本国家についての歴史主義的な日本国家論を議論していくことが必要であろうと考える。

### 〈研究資料〉

## 中村丈夫氏グラムシ論集

—歴史主義と政治の主体—

●30年にわたる労作19点を選び、時系列で9章を構成

A5判 211頁  
並製  
(赤カバー付き)  
価 1500円

—編集・解説—  
中村丈夫氏グラムシ論集編集委員会  
発行 フェニックス社

\*注文は \_\_\_\_\_ 03(3312)4803前田まで

# 解題・『中ソ論争』とイタリア共産党

三 森 義 道

「中村丈夫遺稿集」(USBメモリ)には論稿一八一本、本文八七四頁が収録されており、編集者によって収録論稿が一六の項目に類別整理されているが、「中国社会主義」という項目は存在しない。筆者は中村丈夫氏の「中国社会主義観」あるいは「分析」に多大な興味を持っているので、本USBに収集された中国社会主義関連論文を抽出してみた。(カッコ内はノンブル)

- ① 「中ソ論争」とイタリア共産党 (371-376)
- ② 中国共産主義と日本共産主義 (387-396)
- ③ チェコ「民主化」と中国「文化革命」——社会主義運動についての教訓 (417-424)
- ④ 中国新憲法の本質とその批判 (465-468)
- ⑤ 日中プロレタリアートについての国交回復 (566-569)

これらの論文は、それぞれのできごとに対してリアルタイムで書かれたものであるが、その論稿の中に入り込み歴史の過去に立ち戻ってみると、現在の中国の官僚独裁資本主義を予見する貴重な提起が各所にみられる。論文の書かれた時代は古いが、語られている内容は今日に通じるものである。

今回は、第一回として一九六四年一二月に季刊『唯物論研究』第二〇号に掲載された「中ソ論争」とイタリア共産党」を紹介しよう。

中ソの公開論争が本格化したのは一九六二年一月以降とされているが、一九六二年に部分核停問題、中印国境衝突、キューバ・ミサイル危機などの事件が相次いで起きて、中共の対ソ非難がエスカレートし、フルシチョフの中国批判のトーンもまた高まった。中共は中ソ論争を担う「中央反修文件起草小組」を設置し、毛沢東の陣頭指揮の下でこのグループが一月から活動を開始した(正式成立は一九六三年二月)。これが中ソ論争本格化の起点となったのであろう。

一九六二年一月から翌年一月下旬にかけて、東欧四カ国とイタリア共産党の党大会が相次いで開催された。各党はソ共の中共非難に同調して大会で中共非難を展開した。いわゆる「反華大合唱」である。とくに一二月二日から八日にかけて開催されたイタリア共産党の大会で、書記長のトリアッティがアルバニアと中国を名指しで非難した。核兵器の出現によって戦争の性格が一変し、核戦争は人類の自殺行為であるのに、毛沢東は原爆を張り子の虎だと主張し、核戦争の脅威を認めようとしない、などの非難が含

まれる。反発した中共側も、「構造改革」論で知られたトリアッティに集中的に攻撃を浴びせた。一月に開催された東ドイツの党大会にはフルシチョフがみずから代表団を率いて出席し、初めて中共を名指しで批判したが、同時にフルシチョフは論戦停止を呼びかけた。

右の文章は「グローバル化時代の中国現代史一九一七—二〇〇五」(小林弘二著)から引用したが、「中ソ論争」に関する書籍は今では図書館で見ることができず、それも貧弱な在庫になっている。「中ソ論争」に関する基礎的な知識に関しては、まずネットのウィキペディア「中ソ対立」の項目をご覧いただきたい。時系列で主要推移が書かれている。

## § 「中ソ論争」とイタリア共産党」

中村氏は本稿(中村丈夫、季刊『唯物論研究』一九六四年一月第二〇号に掲載)の冒頭で次のように述べている。

「中国の核実験と期を一にしてフルシチョフ首相解任が報ぜられたとき、一商業紙はその解説に「死せるトリアッティ、生けるフルシチョフを走らす」と書いた(一〇月一七日夕『日経』)。アイザック・ドイッチャーのような評論家も「最後の一撃をくわえたのはイタリア共産党の指導者故トリアッティ氏」であり、このことは「反フルシチョフ派にとってはまたとない幸運であった」としている(一八日『朝日』)。これらはたちのよくない筆のすさびに属するものであるが、問題とされたヤルタでのトリアッティの遺稿が国際共産主義運動に占める比重を物語っているといえよ

う。」

本稿が書かれたのは中村氏が四四歳のときで、当時は得意の翻訳力を駆使し、グラムシなどイタリア語諸文献の翻訳に精力的に取り組んでいた。六一年に日共を除名され、六七年の社会主義労働者同盟創設にいたる途上の時期である。

「トリアッティの主張は「中ソ論争」なるものが本来、正常な理論的思想的論争ではなかったという次元での、そのような反省をふくめての「論争」の現実的收拾策であり、同時に、イタリア共産党がとくに「スターリン批判」以来一貫して追求してきた世界的現実の発展にたいするマルクス主義の理論的思想的たちおくれの原理的克服策である。その意味で、「中ソ論争」はイタリアの党がよぎなくされた介入——これまでは遠慮がちなといつてよいほどの——を機として、原理的な次元にたかめられる必要があり、個々の国のマルクス主義者が自国での現実の分析と経験の総括をつうじて、新しい探究に参加する責任は倍加している。亡きトリアッティがわれわれにいいのこしたものは、このような探究の方法論であると理解することができる。」

ここで中村氏は、「中ソ論争」はイタリアの党がよぎなくされた介入、と述べているが、トリアッティは中共から乱暴な論争を名ざしでふっかけられても、終始マルクス主義者として原則的に対応していた。ただし、イタリア共産党が一九六二年一二月一八日の第一〇回大会で論争に公然と巻き込まれて以来、それにた

いしてとった態度は大きく違って中国側から見ればソ連寄りであった。中村氏の立場もイタリア共産党に近い。中村氏は次のように述べる。

【イタリアの党からみた国際共産主義運動内部の論争は、第一にソ連共産党第二〇回大会ががちとった「転換」(トリアッティはむしろ「正しい道の再把握」とよんでいる)を深化、発展させる探究でなくてはならない。具体的情勢を具体的に分析するマルクス主義の基本的方法が不毛化、形骸化したスターリン的教条主義、セクト主義、機械論から解放された結果、社会主義世界体制の規定的作用、戦争の可避性、社会主義への多様な道、民族解放運動の変革的役割、社会主義的民主主義と党内民主主義の結合など新しい命題のもとにマルクス主義と全運動のたちおくれを回復することが可能となった。この成果をまもりぬくためには、新しい問題に古びた抽象的な原則的公式を対置する中共の方法ははっきりと拒否されなくてはならない。】

このかぎりでは、ソ連の党とイタリアの党の立場はまったく一致するが、中村氏は両党の間にニュアンスの差異を見てとっている。また注目すべき点として、イタリア共産党は、第二次大戦後西欧労働運動の植民地革命へのとりくみが不十分であり、それを資本主義国での革命の発展に従属させるあやまりをおかしたことの自己批判を認めていることがある。これはソ共の立場とは異なる意見だ。

ヘゲモニー装置としての、社会主義社会の原型としての党というグラムシの理論を、大衆党と前衛党との完全な統一を要求する運動のなかで、革命運動全体における自由の発展のなかでいっそう展開する任務を提起している。

このような現代における「新しい党」は、全国組織会議への中委報告「現在の問題と任務にたいするイタリア共産党の組織の対応」のなかで具体的ななたちをとる。政治生活への大衆の参加と介入を促進するため、統治の党となるため、全党員による討論と政策作成、下からのコントロールの機構が保障され、地方分権路線が組織的必要性からではなく、現実の複雑な諸条件に対応し、市民社会での機能を最大限に発揮する政策の分節化の必要から推進される。全党員のイニシアティブがあつてはじめて、中央機関は国内問題においても、国際運動における論争においても、正しい政治路線を確保することができる。トリアッティの遺稿が党の正式文書とみなされるという決定もこのような内部生活を背景としてのことであつたであらう。】

現実の歴史の進行は、一九七〇年代には党綱領から「マルクス・レーニン主義」や「プロレタリア独裁」を放棄し、「ユーロコミュニズム」路線や「歴史的妥協」を推進し、首都ローマをはじめとする地方自治体の長を数多く輩出することとなる。筆者は、イタリア共産党の歩みからするならば「プロ独」の放棄は当然のことと評価する。その後、イタリア共産党は解散した。本稿の最後に中村氏は次のように述べている。

【他方では、イタリアの党はその内的必然性から、正常な国際論争が当然もたらすべき成果の具体的追求を独自に展開した。われわれはその好例を、政党の理論および社会主義的民主主義の理論をねりあげようとする努力のうちにみることができ。注自すべきことには、そのいずれもが実践とふかく結びついており、前者は一月七日にひらかれた全国組織会議での党活動および党組織の刷新を促進し、後者はイタリア社会党との論争をつうじて両党間での労働者階級の単一党の模索にまで進展している。】

このテーマに中村氏は興味を示し、次のように問題の所在にふれている。

【政党論または党理論は、『クリティカ・マルクシスタ』誌の昨年九—十二月合併号に特集されている。理論的には、レーニン型の「新しい党」を現在の歴史的段階で継承し、発展させ、場合によつては超克することが中心課題であり、スターリン型の軍事概念からの類推による党イデオロギーは全面的に批判される。U・チェンローニ「政党の理論のために」、L・マグリ「革命党についてのマルクス主義理論の諸問題」、A・ナツタ、C・パイエツタ「イタリア共産党の形成と経験における民主集中制」、V・ジエラターナ「イタリア諸政党における民主主義の形態と内容」、G・アメンドラ「大衆運動と大衆組織」、E・ベルリングエル「イタリア社会の変化と対比しての党の状況」などが主論文であるが、たとえばマグリはロシア革命の客観的限界の、世界革命の特定段階の反映としてのレーニン党理論の限界を大胆にとりあげ、

【しかし考えてみれば、「スターリン批判」後の前進のなかで、ソ連の党とイタリアの党との間には思想方法のうえでかなりの差異があつたことはいなめない。それは一口にいって、新しい世界的現実をマルクス主義の発展に反映させる点での静的な完結的な姿勢と動的な展望的な姿勢との差異、あるいは前野良氏が指摘するように体制の論理と運動の論理との差異であらう。事態はなおも流動しつづけており、結論めいたことはさけるべき段階にあるが、すくなくともイタリア共産党が提起した「多様性と自主性における統一」の方針は、戦後二〇年間マルクス主義につきまとうてきたたちおくれを克服するうえで、認識論的価値をもつものと考えられる。そしておそらくは、この方針が相対主義でない保障は世界的な視野と関連のもとでのイタリア革命にある、という自信と責任感を同党は抱いているのであらう。】

本稿は「中ソ論争」を表題にかかげながら、トリアッティのイタリア共産党の立場紹介が主な内容となつている。中村氏から見ればスターリン主義と毛沢東主義は批判の対象でしかなかったものと推察できよう。フルシチョフの平和共存路線にも批判点が多かつた。中村氏が当時、構造改革派といつてもソ連盲従派とは一線を画していたゆえんである。

蛇足ながら当時、中ソ論争において中国を支持していた筆者は、現在の中国共産党が中ソ論争の歴史的総括を避け口をつぐんでいくことは許し難い。

# アジア太平洋戦争の敗北の総括と旧日本軍隊論・試論(一)

茂呂秀宏

I はじめに なぜアジア太平洋戦争敗北総括と旧日本軍隊論か  
支配体制内の分化を生み出す安民法制論議

集団的自衛権行使のための安民法制改変の国会議論が衆議院での強行採決後、現在、参議院で繰り広げられている。一方、この法案に反対する人々による国会に向けた街頭活動も持続している。この法制改変反対の人々の主な意見は、「戦争法案廃案」というスローガンにみられるように反戦平和であり、「戦争のできる国家づくり」反対というものであるが、憲法審査会で自民党推薦の憲法学者から改正諸法案違憲論が出されて以来、違憲論からの主張が前面に出されてきている。また、世論も違憲論から反対に大きく動いている中、明仁天皇の長年の護憲・反戦平和の言動と安倍政権の方向性との食い違いが際立ってきている。

戦後体制維持からの安民法制改変反対論に同調する左派主体  
政権と国民の分裂の深まりを背景とした、このような体制内部の亀裂・分裂の顕在化という情勢の中で、左派主体は、ほぼ護憲、反戦平和に同調した戦後体制の維持・保守からの主張をなし、戦後の日本国家体制そのものの批判に帰結する問題提起をすることはできていない。

必要だと判断している情勢認識について、われわれ自身がどう認識しているのかを明らかにする必要がある。そもそも情勢認識を介在させて方針を立てるといふスタイルの後退が顕著になっている。左派主体においてさえ「戦争ができる国家づくり」以上の「情勢認識」がどこまでできているか疑問である。

第二の問題として、きちんとした情勢認識の共有化ができたとしても、情勢に対して日本がどのように対応していくべきなのかという重大な問題が出てくる。情勢に直対応することはできず、返って、どのような情勢認識をするかは、この観点の如何によって大きく影響されてくる面もあり、ここではこの第二の問題を考えてみたい。

## 安民法制改変の真の狙いは自衛隊の「当たり前の軍隊」化

戦後の日本の外交の基調としては、日米安全保障条約を前提にした軽武装の——専守防衛のための武力行使に限定された——「軍事力」を背景にした外交ということになるであろう。今回の集団的自衛権とそのための安民法制の改変問題の本質は、要約すれば武力行使の制限を撤去した当たり前の独立国家の交戦権を保有する「当たり前の軍隊」への転換ということであると考えられる。安倍内閣には、この転換を憲法改正を先行して行なうのではなく（試みようとしたができないとの判断にいたった）、現憲法を無視してでも法制改変の実現を先行させようとしている。が、今の安倍内閣の国会対応ではこのような本質的問題は正面に出されず（出せず）、法案が改変されてもこれまでの専守防衛論的制限のある自衛隊とはあまり変わらないとの言い訳に終始し、不毛な議論の繰り返しになっている。この点は維新の党などの右からの

政権側の主張の骨子は、①現憲法下においても自衛権は認められている ②集団的自衛権も自衛権の枠組みの中にある ③自衛権の概念は情勢によって変わる ④中国軍の膨張、北朝鮮、ISのように危機を与えかねない国家の登場という新たな世界情勢の中で集団的自衛権の行使が必要となってきたこと、日本が自ら積極的に平和を作り出していく必要が出てきている ⑤戦後の日本は、アメリカの核の傘の中にいて平和を維持してきたのであり、そのことを抜きにした平和の主張はない」と要約することができると思う。安民法制改変反対勢力はこれに対して、現憲法擁護・安民法制違憲論からの反戦平和要求で対抗しているわけであり、情勢への対応という意味においては、政権側の保守が「革新的」であり、政権批判側が「保守的」となっており、このままだと時間の推移の中で批判側は衰滅しかねず、この運動のさらなる展開とともに、その質的転換が大きな課題である。このような中で左派主体は本来どのような対応をとるべきなのであるか。

必要とされる情勢認識の深化とアジア太平洋戦争の敗北の総括  
この課題に有効に 대응するためには、どのようなことが明らかにされる必要があるのだろうか。まず第一に考えなければならぬことは、情勢把握の問題である。政権側が集団的自衛権の行使が

批判が出ているが、結論として誤解を恐れず言えば、政権側は「当たり前の軍隊」化ということは、国防のための徴兵制もありうるものということを正面に出し、論陣を張るべきである。

否定すべきは旧軍の総括抜きの自衛隊の「当たり前の軍隊」化  
ただ、その場合条件がある。ひとつは、日本人だけでも三〇〇万人以上の人的被害を出し敗北したアジア太平洋戦争の総括（この戦争の目的から始まりそもそもこの非合理的な戦争とは何であったのかを明らかにすること、その敗北の原因）と、それを担った旧日本陸海軍とはいかなる軍隊であったのかということを明確にすべきであること。もう一つは、日米安全保障条約によって国民には曖昧化されている核兵器保有の問題については、避けて通らないことである。

とくに前者の問題については、真珠湾攻撃によって、長期戦になれば敗北が明らかであった対米戦に踏み切り、アメリカの全面的参戦による第二次世界大戦の幕を切って落としたが、絶対的国防圏を突破されても「転進」と称して敗北を認めず、無意味な戦闘を長引かせ、国内からの（ソ連を仲介とした）和平交渉論さえ「一撃和平論」で却下し、敗戦前一年間のレイテ島、硫黄島、そして沖縄戦、東京大空襲をはじめとする本土空襲、広島・長崎への原爆投下、そしてソ連参戦などで、多くの非戦闘員を含む二〇〇万人に及ぶ犠牲者を出したことの戦争指導者たちの責任はどう問われたのか。今まで誰がその責任をとってきたのであるか。アジア太平洋戦争の敗北の総括とそれを担った旧日本陸海軍の責任追及抜きは「当たり前の軍隊」の保有論については容認できない。それなくしては、これからも日本国家がかつてのような非



合理的な戦争を行なわないという保証がまったくないからである。それなくしては、将来において、同様な非合理的な戦争に日本人民が加担せられる可能性が否定できないからである。

今法案は世論の動向に反してでも通過させられていくと思うが、たとえそれが通過しないことになったとしても、先の戦争の総括もなされぬままに、自衛隊の「当たり前前軍隊」化は、実態化させられていくものと思う。そして、大義ない戦闘行為において「新日本軍」から戦死者が出てくることになるだろう。それをここで「新日本軍」の戦闘行為を正当化する国民的「大義」を形成していくことになるのか、はたまた、新日本軍の拡散・解体の端緒となっていくのかは不明だが、さまざまな新たな矛盾が生み出されてくると思う。安保法制改変によって再編された「新日本軍」(再編された自衛隊)の誤りを根源的に批判しその解体につなげていく手立てとして必要な条件は、無意味な膨大な犠牲者を生み出した非合理きわまりないアジア太平洋戦争の敗北の総括とそれを担った旧日本軍隊総括を日本人民自らが保有することであろう。

## II アジア太平洋戦争敗北と旧日本軍隊総括の諸手立て(メモ)

私はこの総括の手立てとしてまず、明治以後からアジア太平洋戦争まで存在した旧日本帝国陸海軍とは何であったのかというテーマに絞り、中村丈夫氏の著作並びにその周囲の諸軍事論を対象にして検討を始めたいと思っている。

本稿はまずこの問題を論じている関係論文の特定からはじめ、今後の作業の端緒としようとするものである。

### 1、中村遺稿集から

『クラウゼヴィッツの洞察』の中に補論として「小山広義兵学の遺産」という論文があり、元々同論文が解説せんとした『戦前日本マルクス主義と軍事科学』(エスエル出版会刊)という小山弘健氏の著作が紹介されている。また、手元には小山著の『軍事思想の研究』(新泉社刊)という著作があるが、そこには「日本近代兵学の形成——川上操六」から始まり、「日本近代兵学建設」……「日米海兵術の対抗——マハンと秋山真之をめぐって」などの論考がある。

### 4、その他の手立て

その他この問題の探求において検討してみたい論文について最後に列挙しておきたい。

- ・『新「国軍」用兵論批判序説』(鹿砦社刊、山崎カヲル著)の中の「II 危機解決の試み(1)——『日本式戦法』」の中に、

### 小山弘健の軍事技術史の見解

まず第一に対象としたいものは、今回の『中村丈夫遺稿集』になるわけであるが、その中に、一九七二年三月に『図書新聞』に掲載された「マルクス主義軍事研究と七〇年代」という文章が収録されている。これは中村丈夫と小山弘健との対談であり、平和と民主主義体制における軍事論的限界と七〇年闘争からの革命的軍事論の展望というものであるが、戦前のマルクス主義軍事論への言及と戦前の日本軍隊論についての小山弘健の以下のような軍事技術史の見解が載せられている。「日本の軍事技術の構造は、明治以来一般的の生産技術的な基礎が弱く、いわゆる転倒的形態をとっているために長期戦になるほど不利になるという結論になる。」このことはすでに一九三〇年代の『唯物論研究』に出されており、かつそれは初版で絶版にさせられている。

このような見解については、山本五十六をはじめ、硫黄島の戦いを指揮した栗林忠道などの現場の最高指揮官も知っており、それなりに見解は述べているが、結果は無謀な長期戦に突入していたわけである。なぜそうなったのか？

### 稀有な中村丈夫の太平洋戦争敗北の総括視点

また、この対談の最後に中村丈夫は(七〇年闘争が進展して)「かりにもしも階級的人民的な力量が政治的なものから軍事的なものへと形成されていくならば、……内戦が国家間戦争にまで転化せざるをえないような展開もでてくる。その場合のアメリカの軍事介入が予想される。そこで、かつて日本帝国主義が完敗した太平洋戦争をあらためて総括しなければならぬ。」と書かれている。改めて七〇年闘争の熱気が冷めやらぬ時代に話された文

「日本式戦法の歴史」、「天皇制と日本式戦法」などの論文がある。

- ・『プロレタリア兵学教程』『ベトナム革命戦争史』(鹿砦社刊、坂本聡三・渡辺正之共著)の中には日本軍隊論を探る時の方法論として参考になる記述が多くある。前者は七〇年闘争のプロレタリア兵学からの位置づけを中心に、後者はベトナム戦争史を中心に編集してある。

- ・『曙光』三〇二〜三〇四号連載、林秀成論文、「あの戦争とは何だったのか——戦後五〇年——無歴史的状况の中で考える——」(左翼でない著者によるものとして)

- ・『失敗の本質——日本軍の組織論的研究』(ダイヤモンド社、一九八四年刊)

### III アジア太平洋戦争の敗北からの戦後体制を考える手立て

#### 『或る戦時日誌』から

最後に中村丈夫氏が戦時下、軍務についているとき書かれたものを一九七七年出版した『或る戦時日誌』(鹿砦社刊)である。

この著作は、「……その歴史的・文明的証言としての意味はもろろのことであるが、……戦時下の一つの日本のインテリゲンチヤの精神史となっている……」(編集部「刊行に際して」)というものであり、日本軍隊論を正面から論じたものではないが、多くの示唆を得ることができる。その一例として常に冷静な文書スタイルを崩さない中村さんが珍しく感情あらわにした表現を行なった戦争終結時の記述を紹介しておきたい。

「……かくて十五日一二〇〇停戦の詔勅およびポツダム宣言受

諾の回答となった。敗戦の全重圧は人民の肩の上に押し付けられ、天皇は生命・財産を保持してアメリカの軍門に下つたのである。……米紙は武装解除に関しては日本軍の見事な協力ぶりを伝えている。……この恥ずべき陰謀を成立せしめた客観的基礎はアメリカの対日政策に見いだされなくてはならない。彼らはすでに勝利が確定したのを信じたが、これ以上の犠牲を怖れた。投降を知らざる日本軍を武装解除させるには日本大本营自身の手により、天皇の天命を行わせるを最も有利とした。……それ以上には……来たるべき米ソ対立においては、日本はアメリカのソビエトに対する障壁、番犬、傭兵として位置づけられなければならない。……日本の憎むべきミリタリズムを粉碎し根こそぎ解消させてしまえば、たとえミリタリズムの信仰の中核が残ったとしても、国体という餌をしゃぶらせるだけで日本人の反アメリカ感情を拭い去ったほうがとくなのである。民主主義日本はソビエトの友であってはならないのである。……また、アメリカ金融資本の旗のもと日本の経済、アメリカデモクラシーに指導された日本の政治は、武器なく軍隊なき君主制に何ほどの危険がある。それどころか、……世界を支配すべきアメリカの神聖な権威ある伝声管としてなかなか役に立ちそうだ。……

かかるアメリカの出方は日本の支配階級の利益に正しく符合するところである。……軍閥だけが人身供養となればすべて円満に解決できるのだ。……

話は急速に決まった。いざ調印を！……戦争の終結はもとより反対すべき筋合いではない。むしろ無条件で大いに喜ばねば

ならないと単純に平和主義者はそういうだろう。しかしそれは、厭戦主義者がいう言葉である。真に戦争に反対するものはかかる形の戦争終結に反対する。かかる形で、自国政府が倒壊せず、幾分弱小化した堂々と命を延ばし、更に新たな勢力に支持されていることに対して、無限の憤怒を覚えるのである。今や日本人民の頭上には二層の陰鬱な穹窿がのしかかっている。」

これが書かれたのが一九四五年九月二日ポツダム宣言受け入れから二週間少々してのこと。  
日本の戦後体制の本質を的確に指摘している。そして戦後七〇年たった今、戦後日本国家体制を体現している明仁天皇と、根こそぎ解消されたはずの日本ミリタリズムの新たな復権をもくろんでいると批判される安倍政権との齟齬が拡大している今日、左派主体の立ち位置が今ほど問われているときはない。



## 中村さん最晩年の諸事情と課題意識

前田浩志

今年六月一日、大石和雄代表の『歴史と主体』創刊号へのアツピールが発せられてから三カ月、今日までの短時日でその創刊号が発刊されたことを、まず慶びたい。

本号では、この三〇四年間進められてきた故中村丈夫氏の遺稿を収集、顕彰する事業（一箇のUSBに収録される）の成果をふまえた研究論文的なものが、まず要請されるのだろうが、その辺の精華は大石和雄、三森義道、茂呂秀宏の三氏の論稿に譲り、本稿としては一歩下がって、中村丈夫氏に関する個人的な回顧をベースとした周辺の考察を行ないたい。いわば、広い意味での評伝的な要素を意図しているのであるが、そのようなものも創刊号にひとつ必要だろうと思ったからである。十分に研究論文的なものを繰り出しえない筆者の現況の反映でもある。

### 1. 評伝志向と最晩年への想い

「評伝」ということでは、すでに七年前、実弟長哉（たけや）氏を代表として結成された中村丈夫追悼集刊行会の編集した『紙碑 中村丈夫』が発行されている（彩流社刊）。正面から「評伝中村丈夫」と謳っている書物ではないが、『紙碑』の含意にはそのようなものがあったといえる。

とくに、「第一章 八七年の軌跡に想う」は、評伝的内容に迫るものであった。同章の節構成と執筆者を掲げれば、次のとおり。

第一節 兄を語る（中村長哉）  
第二節 戦後のことども（金井敏博）

第三節 社革から社労同の頃（小塚尚男）  
第四節 青共委の時代と中村さん（大石和雄）

しかし、この四節から進んで、中村氏の非常に起伏に富んだ生涯をカバーする評伝的なものをめざすということは、意識されなかった。それは何より、この企画を編んだ者たちの想いが中村氏への「追想」にあったからだろう。「追想」が多々集まって凝結したものが、この稀有な書物、『紙碑』であるという想いである。評伝・伝記と追想の間にはかなりの溝がある。

もちろん、この書物が編まれた当時の事情というものもある。同書の刊行は二〇〇八年。中村氏死去の翌年であり、死去の年の七月に開催された「徳ぶ会」（於主婦会館）の熱気を承けて、急遽企画・編集されたものだったのだから、このような年代的リレーによる分担執筆とならざるをえなかったのである。

戦前、大学時代の共産党再建運動と見なされたサークル活動の時代から始まって、戦中の海軍従軍時代、疾風怒濤の日本共産党

職革時代、六〇年代初頭からの社会主義革新運動（政党名、日共より社会主義革命などを主張して分裂）時代、そして一九六六年頃からの社会主義労働者同盟（後のいわゆる新左翼八派の一つ、同名の別系統の組織があり注意）時代、そして七〇年以降の青年共産主義者委員会（青年組織ではなく、共産主義的党派名、社会主義労働者同盟の分派から形成された）時代、というようにいわば組織帰属の態様によって、四名によるリレー執筆が行なわれた。

\*この『紙碑 中村丈夫』の評伝的要素ということに付言すれば、同書の第四章資料篇は労作である。とくに荘司良樹氏の年譜は有用。同章の三節を掲げれば、以下のとおり。

第一節 活動年譜（作成・荘司良樹）

第二節 広義構造改革派の組織系統（図）（作成は前田浩志・金井敏博）

第三節 中村丈夫氏書誌（作成は前田浩志・桜井英明）

この『紙碑 中村丈夫』の刊行よりすでに七年が経過している。その中で今回、中村丈夫遺稿集（データベース）が完成し、歴史と主体研究会が発足することとなった。

そこで、もっともリアルに思いつくことが、大石和雄氏が記した青共委時代の後を承けることが、ひとつ必要ではないか？という想いであった。

もちろん、大石氏の記述は、中村氏の発病以後にも及んでいる『紙碑 中村丈夫』第一章第四節の五、組織再編と打ち続く苦闘の後半——小見出し「突然の断絶」と「業績まとめる努力」の箇所、同書八八〜九〇ページ）。ただ、発病後の中村氏との連絡役を

養中ということで通されていたように思う。

つまり、外部との接触ということではかなりに孤立的であったが、内面の頭脳活動はそれなりのレベルで続けられていたということである。筆者は一応組織との連絡役ということ、二、三カ月に一回くらい練馬の富士見台のお宅に参上したが、なるべく軽い話にとどめ、最後に会費をいただくという形で、氏のそのような療養スタイルを努めて乱さぬよう配慮したつもりである。

その中でも例外的なことはやはりあった。それは、氏の理論的な業績をいかに世に遺すか？という問題であった。

氏が病いに倒れたのは一九九七年、七七歳の時であった。しかし、七〇歳代中盤といえばいかなる知力旺盛の人でも、頭脳活動に一定の衰えを感じるのは、致し方ないところだろう。事実、氏が執筆年度順に作成された「目録パンフレット」（後述）を見ると、一九九四年に入って、氏の執筆活動が目に見えてダウンしたことがわかる。九四、九五、九六年と、書いたものが少なくなるのである。

その中で氏が、自分の理論的軌跡を何らかの形で残すことを考え始めたことは確かだろう。そこで氏の考えたことが独特で、自らの論文・レジュメの類いの執筆目録を作ることであった。

ちょうどその頃、組織（当時は、評議会的変革をめざす政治委員会へ改編）のほうで、組織文書の保存管理を図る動きがあり、氏はそれを捉えて、まず自分の書き貯めた論文・レジュメの類いからそれを始めることを申し出た。つまり、氏は六〇年代中盤から、書き貯めた主なものを捨てず、ファイリングしていたのである（それら諸文書は必ず執筆年月日が記入されていた）。このこ

務めたのが筆者だったこともあって、格別の想いが残るのである。もう少し紙数を費やして、大石氏の三ページをふくらませてみたい。

## 2、周辺の事情と書誌的必要事項

一九九七年九月、中村氏が脳梗塞で倒れ入院されたとの報を受け、筆者は練馬の関町だったと思うが、脳神経内科の病院に氏を見舞った。氏がベッドから身を起こされ、「大丈夫だ」と言われたのを聞いてホッとしたことを覚えている。しかし、残念ながら中村氏は以降一〇年、徐々に病状を悪化させていった。ただ、それは緩やかな低落であり、一挙的な頭脳活動のストップが訪れたわけではない。

氏は、筆者のもたらす組織や運動の諸文書はもちろんのこと、新聞雑誌、テレビより様々な情報をインプットされ、ファイリングを行ない、日記を付けていた。一切の対外的活動をしないとされていたが、外出をしないということではなく、近辺の散歩は楽しんでいた（最後まで脚は達者であった）。ある時、筆者が丸ノ内線南阿佐ヶ谷駅付近の青梅街道の歩道を歩いていて、ご夫妻に不意に出くわし、ビックリしたことがある。中村家の菩提寺である成宗（現成田東）の海雲寺に詣うでられたとのことであった（氏は杖にサンングラスという恰好だった）。

手紙を書かない方だったので、書面による意思疎通はなかったと思う。電話を活用されるということもあまりなかったからである。来訪者がどれほどあったかは筆者にも不明であるが、病氣療

とからも、自らの軌跡を遺すことに対する氏の執着がわかる。

組織内で前田浩志・桜井英明による目録作成の小委員会が九七年四月に形成され、「目録パンフレット」が発行されたのは、一九九九年の一月であった。中村氏が倒れたのが一九九七年九月であるから、氏の療養の初めの三年近くは、この自己の軌跡を遺すことにかかなり振り向けられていたことがわかる。

氏は自宅に貯めた諸文書を大挙供出するとともに、「執筆備忘録」を書いて、「目録パンフレット」作成を助けた。さらにパンフレットの印字（これが面倒であった）・印刷費用が足りないという見や、財政的な支援さえされたのである。

でき上がった「目録パンフレット」は当然、論文・レジュメのタイトルが並んだだけの無味乾燥なもので、若干普及しづらいと考えると、今度は「目録パンフレット」の付録の発行を指示された。それが小冊子『追憶の人々』であった。中村氏が情感を込めて書いた、伊藤隆文・山口裕・保坂浩明・伊藤律の四氏に関わる追想を集めた好文集である（前二者は東大時代の先輩、戦死）。

\*「目録パンフレット」は正式には、「中村丈夫文書庫97-99年整理分文書目録—時系列—帳簿式—」、中村丈夫氏等文書目録作成委員会発行、B5判五四P。『追憶の人々』は付録とはいつても発行はやや遅れ、二〇〇〇年一〇月だった。

特筆すべきことは、この「目録パンフレット」とその付録の完成を、氏はひどく喜ばれたということである。後進の者たちの標（しるべ）になるとともに、二〇世紀を駆け抜けてきた自らの軌跡の一端を同輩の方々に示せる、ということもあったのではないだろうか。

しかし、ここから先が、氏と後進の者たちとの志向の食い違いの出でるところであった。つまり、後進のわれわれは中村氏の著作とまではいかなくとも、述作が世に遺るということを切望していたからである。が、氏は自分の理論的業績が遺るということに非常に高いハードルを設けていたのである。中途半端なものを遺すことは後世に恥をさらすことになるかと常に言われていて、成書はきわめて少なかった(訳書はかなりあるとしても)。

われわれは、まずグラムシ論集、ついで軍事論集の出版事業を考えたが、中村氏は首をタテにふられなかった。まずグラムシ論集については、組織の外郭に編纂委員会(大石和雄・前田浩志・大竹政一・田中一朗)を設け、氏のグラムシをめぐる論文を選び、論集の体裁を作って、氏と折衝した。氏は、①出版社からは公刊しない(自費出版である)、②(研究資料)中村丈夫氏グラムシ論集を正式タイトルとし、あくまで後進の者の学習用の文献とする、の二条件によってしぶしぶ発行を認められた。二〇〇二年六月のことであった。同書のサブタイトルには、編纂委員会の懇望で「歴史主義と政治の主体」が容れられた(これが今回の研究会名称のきっかけである)。

年が経つに連れて氏の病状も少しずつ進行し、次の軍事論集出版問題で氏の頭脳を患わせることは憚られた。氏には伏せて軍事論集刊行委員会(大石和雄・前田浩志・荏司良樹・桜井英明)を作り、クラウゼヴィッツ研究を柱に中村氏の広闊な軍事論諸分野を強引にまとめ、『クラウゼヴィッツの洞察—中村丈夫氏軍事論集—』として公刊した(彩流社刊、二〇〇六年四月)。これについては申し訳ないことではあるが、公刊後に氏に呈示することとな

波動論を考究する頭脳活動が不可能となったところに、氏の最晩年の療養スタンスが発したのではないかと。

すると、グラムシについてはどうか? グラムシ研究については、中村氏はすでに一九八四年という早い段階から、その再出発の意図を披瀝していた(『曙光』一六九号の「理論研究ノート・グラムシ研究の再出発にあたって」)。イタリアでの新しい研究動向を見据えながら、合同版選集によっていた旧来の研究の一新を構想していたようだ。ただ一方では、グラムシ没後五〇年を記念した八七年の夏のセミナーでは、「グラムシの思想と現代革命」を講演して、グラムシ像の大局的な把握方を示してもいた(『曙光』二一〇・二一一合併号)。この二つの流れが氏の頭の中にあつたということが、重要だと思われる。

前者の問題意識は、比較的単純で鮮明である。時が経過するに連れて、ジェルラターナ校訂版による研究が聞こえてくると、氏は校訂版による新たな翻訳事業を考え始めたようだ。ある段階で、それをもに行なうに足る人物として、故上杉聡彦氏を選び、その志をぶつけたところ、上杉氏よりは、「すでに病いを得ており、その任に耐えない」との返信をもらい、新たな訳業は頓挫してしまつた、と述懐されるのを聞いた。今日、自分もまた病いを得て、新たな訳業は諦めざるをえないと洩らされたわけである。

かくして、氏の元には、イタリアから取り寄せた校訂版のセットのみが空しく残ることとなった。本来、後進の者がその志を継ぐべきであるが、浅学菲才の者ばかりでそれがなしえず、東京グラムシ会での訳業の進展に望みを託すばかりである。

った。氏の病状もかなり進んでおり、それに対するコメントをいただくことはできなかつたが、当方に辛うじて間に合ったの感があった。——その後、日記の中で氏が、「不本意である」と記していたことを、令夫人よりお聞きした。その含意がいかなるものか、隠密裏に進めたことなのか、内容的なまとめ方にあるのか、それを伺うことはもはやできない。

### 3、課題意識とくにグラムシについて

中村氏が晩年、自らの三大研究目標として、コンドラチェフ、クラウゼヴィッツ、グラムシを挙げたのは、よく知られているところである。経済学・政治学・軍事学の三全をめざす氏の主体観からして、当然のことと思えるが、最晩年、病いを得た後、それらが思うに任せなくなつたことはいまでもないことである。氏は経済学—コンドラチェフについては晩年、市川泰治郎氏らと協力しての長期経済変動同学会に望みを託していたように見える。中村氏晩年の理論課題の最大のもは、間違いなくここにあつたろう。一九八七年には旧編書『コンドラチェフ景気波動論』(亜紀書房刊)の重版に際して、わざわざ「重版にあたって」を書かれていたし、発病直前の一九九五年、九六年の論稿は、大瀧雅之氏の「資本主義の多様性」「景気循環の理論」をめぐるコメントであつた。この二つのコメントは当時、氏が藤沢在任の市川泰治郎氏のもとに通つて報告し、その後、組織に流されたものであつた。

しかし、発病後はこの藤沢行きもかなわず、氏の中心的課題は宙に浮いた形とあつた。思うに、最大の柱としての経済学—長期問題は前記の後者、「グラムシの思想と現代革命」論文のほうである。実はこの論文のテキストは二種であり、前記『曙光』紙論文の前にコピーのレジュームがあつて、それが夏のセミナーで報告された。そのタイトルは「グラムシ主義と現代革命」であつた。つまり、中村氏はセミナーにおいては「グラムシ主義」と打ち出したが、後日、それを『曙光』紙に掲載する段階になつて、「グラムシの思想」とトーン・ダウンさせているのである。

このことはただちに、「レーニン主義」とも結びつく問題であり、レーニン—グラムシ関係という今もなお論ぜられている大問題と深く連関する。中村氏が一方で「グラムシ研究の再出発」を主張しながら、当面理解されるところのグラムシの思想・理論をいかなる位相のものとして言上げしていくのか? を真剣に考えていたことは、実践家として当然のこととは言つても、われわれも大いに学ばなければならないところである。

今、筆者は、中村氏のためらいを共有しながらも、「グラムシ主義」の提出のほうを志向していることを付け加えておきたい。詳細は、「残存『新左翼』への提言のために」第四章四—二ターゼ(グラムシ主義の模索)を参照(『新媒体準備版』、二〇一〇年七月一五日発行)。

中村氏の療養の前半期は、前述の中村丈夫氏グラムシ論集編纂委員会の活動もあつたし(二〇〇二年の論集刊行後も活動を継続)、一方で片桐薫氏の肝煎りで発足した東京グラムシ会の活動もあつた(中村氏は形式的に同会の顧問に就任)。テーマとしては、サバルタン問題が議論され、上村忠男氏らの理論的提起もあつた。しかし、それらは中村氏の課題意識とは触れ合わなかつた

のかもしれない。

クラウゼヴィッツ―軍事学においては、『クラウゼヴィッツの洞察』刊行が、前記のような特殊事情下で行なわれたこともあり、最晩年の中村氏との関わりを論ずることは止めておきたい。しかし、療養下でも行なわれていた氏のファイリング中には軍事関係のものかなりあり（軍事情勢的なもの）、氏の絶えざる関心が働いていたことは伺える。しかし、『クラウゼヴィッツの洞察』は、自画自賛となるが、章構成から注釈まで配慮の行き届いた労作であり、中村氏に通読していただけなかったことは、返すがえすも残念なことであった。

さて、中村氏最晩年の課題意識として、もう二点を挙げておこう。ひとつは既成社会主義論、二つは歴史学―歴史認識である。

既成社会主義は中村氏の術語としては、前期社会主義となる。これは故前野良氏（政治学者、とくに東欧問題での先達）との協働で提起された概念で。わかりやすく言えば、『袋小路の社会主義』とも言うべき論であり、社会発展論的なマルクス主義の通念をはるかに超えたものであった。この故に、東欧―ソ連の大崩壊とその後の転成過程は、氏にとって大いに興味をそそるものであったはずである。「しかし、私はもうそれを考究できない。それは若い君たちの任務であり、そこでこそマルクス主義の真の価値が試される」と述べられていた。発病の直前でも、ポーランド、ロシアの状況をいくつかコメントしている。

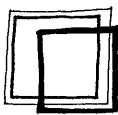
中村氏にとって講座派歴史学というものは、いかなる位置を占めていたのだろうか？ かつて天皇在位五〇年が言われた一九七五年頃、青共委が歴史畑の演者を立てて政治集会をすることがあ

った。その時、中村氏が強く推薦されたのが、異端的歴史家、松浦玲氏であった。松浦氏は京都よりわざわざ夜行寝台で上京し、

青共委の歴史（学）志向の幕を切って落としてくれた。したがって、中村氏が講座派批判の視点を持つていたことは確かだろう。

氏が病中、ファイリングしたものの中に、「前田浩志」と記された一冊があった。その中身は、筆者が新世紀初頭にM&R研究会において企画、主宰した「日本をみつめる」という歴史テーマの四連続講座の文書類であった。氏はそのような文書にも目を通し、赤線を施していた。赤線はかなり異端の見解といえる所に施されており、氏の引っかけがほのかに伝わってくる。

思えば氏も東大の人であり、それなりの正統的？歴史観を少なからず承けていたはずである。それとの格闘は必ずあったはずであり、病中に至つてもなおその労を払っていることは銘記すべきことと思われた。（了）



特・別・寄・稿

## 対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育

ピーター・メイヨー著 里見実訳 『グラムシとフレイレ』（太郎次郎社エディタス、二〇一四年）を読む

黒沢惟昭

編集部謝辞

東京グラムシ会運営委員であり、故中村丈夫氏とは本州大学（現長野大学）で同じく教鞭をとられたことのある黒沢惟昭氏より、本創刊号に玉稿をいただいた。破格のご好意であり、厚く御礼申し上げます。特別寄稿として掲載させていただきました。ただ、氏の玉稿はA4判打ち出して二四枚の力作であり、そのままでは収容し切れなかった。そこで氏の了解を得て、三分の一ほどに縮め、掲載することとなった。お断りしておきたい。（前田）

### はじめに

グラムシとフレイレの比較考察は筆者も関心を持ったことがあるが、フレイレについては素人の域をでないで断念した経緯がある。この度マルタ島出身の研究者、ピーター・メイヨーによって比較研究が日本でも公刊されたことを喜びたい。しかも、比較の接点は筆者の専門の「成人教育」である。因みに、この場合の「成人教育」は、日本の教育界では従来「社会教育」とくに、民

衆教育と呼ばれた分野である。筆者は大学院で、社会教育（民衆教育）を専攻し、長年三井三池の労働組合の学習運動を調査・研究してきたので、著者の研究と重なる面が大きい。一方、グラムシは筆者の長年の研究分野であるので、大変興味深く本書を読み、多くのことを学んだ。公刊された本書、『グラムシとフレイレ』里見実訳（太郎次郎社エディタス）が日本の社会教育関係者に広く読まれることを望みたい。これまでもフレイレは、とりわけその「識字教育」が教育界で関心をよび紹介されてきたが、グラムシとの比較研究は寡聞にして知らない。この点をまず記したい。

### パウロ・フレイレ

パウロ・ヘグルス・ネーヴェス・フレイレ（一九二一―一九九七）は二〇世紀最大の教育思想家の一人と目されている。三〇年にわたる歳月の業績は著書、論文、ビデオやオーディオのテープにまとめられている。成人教育の仕事が中心であるが、教育一般、初等教育や高等教育にかかわる著作も多い。

フレイレはブラジルのペルナンブコ州のレシーフェで生まれた。この国で最も貧しい地域の一つである。中産階級の家産に生まれ

たが、一九二九年の大恐慌がブラジルに波及したとき飢饉を経験した。この経験が都市の周辺部に住む貧しい人々の暮らしと彼を結びつけた。農村部の土地所有者階級は南東部、すなわちサンパウロ一帯に立地する国内産業ブルジョアと歴史的に同盟関係を結んで来た。そこに現出するのは富と権力の著しい落差で、これは、一国の命運が植民地主義や新植民地主義の利害にもとづいて誘導されている地域に通有な状況である。

飢饉の体験を乗りこえ、法律専攻の大学生になった。一九七四年、産業社会事業団で一〇年間働き、その下部組織の教育・文化部で働いた。ここで、貧しい子どもたちとの接触を深め、その親たちともかかわった。その経験は、フレイレの教育思想に大きな影響を与えた。ドクター論文にも如実に反映している。一方、「民衆文化運動」、成人識字教育にも従事した。そのなかで、「語を読むこと」と「世界を読むこと」を統一する彼の識字方法論が確立された（たんなる識字ではないことに留意を促したい）。民衆が文字を覚え、それゆえ「投票権」を獲得するという意味で、政治と直結する効果を持った。そのため、軍事体制によって、逮捕され、国外、ボリビアに亡命を強制され、その後チリに移り、ここでも識字活動に従事した。チリの次はメキシコ、そしてアメリカのマサチューセッツに腰を据え、自主セミナーを開き、ハーバード大学で教えた。

一九七〇年一月、スイスの世界教会評議会で勤務。その一環として旧ポルトガル植民地で、政府の教育コンサルタントとして働いた。フレイレの思想には、ヘーゲルとマルクスの影響が大きい。そのほか、コシトク、グラムシ、フアン、メンシなどの影響も

以上の七章を概説する紙数はないので、専断でそのうちの第六章を取り上げ、梗概を記してみたい。

グラムシとフレイレの思想を総合することは、ラディカルな成人教育を發展させる強力な原動力になるにちがいない。

#### コミットメント

グラムシのコミットメントとは、社会の変革を担う階級への加担にほかならない。ラテンアメリカ民衆教育で行動した人々、とくにニカラグアやエル・サルバドルの教育者たちは、自分の生命を社会変革の大義に捧げた人々であった。これは、マイルズ・ホートンについてもいえる。

#### 抑圧の諸形態

グラムシとフレイレの洞察を一つの命題にまとめらるならば、ラディカルな成人教育実践は、抑圧が多様な形で行われている事実を視野において、それらの総体と向きあう思想性を具えていなければならぬ、ということになるだろう。（本書一九九頁）

#### 連合

他集団との連合についてはグラムシから学ぶべきものが大きい。この点は、ラテンアメリカの民衆教育従事者にも共通するものだろう。

#### 行為者

二人は、西欧資本主義社会では、権力関係において文化が果たす役割が大きいこと、文化は合意をとおしても行われることを示唆している。

#### 異議申し立ての領野としての文化

ある。基調は「マルクス主義と解放の神学である。」（本書三一頁）一七年の亡命のちにブラジルに帰国したフレイレは積極的に政治にかかわり、彼自身が創立メンバーでもある労働者党のために奔走した。一九八六年、夫人エルザを失い一九八八年アナ・マリアと再婚。一九八九年、労働者党政権下の大サンパウロ市自治体政府の教育長に就任。成人教育と識字教育事業にもかかわる。一九九七年五月、カストロ賞受賞のためにキューバ行きを予定していたが、心臓異変のためにサンパウロで息を引き取った。死の直前、こう言ったという。「愛を抜きにして、ぼくは教育を考えることはできない。なぜ自分が教育者であるかといえば、それはなによりも自分が愛を感じるからだ。」（本書三三三頁）この「遺言」は含蓄に富む。

#### グラムシとフレイレ 補いあう両者の総合

さて、メイヨの本書は七章より構成されている。章名のみ掲げると以下のとおり。

- 第一章 序論 ヘゲモニー装置としての成人教育
- 第二章 アントニオ・グラムシ 革命戦略と成人教育
- 第三章 パウロ・フレイレ 批判教育学と成人教育
- 第四章 グラムシとフレイレ 共鳴と相違
- 第五章 グラムシとフレイレ 今日の問題には応えていない諸側面
- 第六章 グラムシとフレイレ 補いあう両者の総合
- 第七章 結論 どんな時代のなかで、それは息づくのか？ 変革志向型成人教育とその社会的コンテクスト

合意を指摘したことはこのほか示唆に富む。文化と教育は重要な位置を占める。成人教育が重視されるのはそのような文脈においてである。この状況においては、これまで無視されていた諸概念が問い直される。

#### 民主主義的な社会関係の下絵

「常識」は「良識」に転化されなければならない（さらに、「哲学」へ）。この転換は学習者が「声にだして言う」ことから始まる。これをもとに矛盾が認知されなければならない。さらに、ラディカルな成人教育の実践によって未来社会を描き出すことだ。グラムシの「工場評議会」、フレイレの「文化サークル」はその実例であった。

#### 社会運動

以上の例が、有効に進められるためには、他の社会運動と連携しなければならぬ。グラムシの「歴史的ブロック」はこのグロバリゼーションの時代にあつてはとりわけ大きな意味をもつ。

#### 社会運動とグロバル資本主義

グロバル化の時代においては、社会移動が急速に進み、グラムシの意味の歴史的ブロックの形成が容易になり、「国民的・民衆的」性格を超越する連携が促進される。一方、土着の諸運動も重要である。運動は、それらの重視によってグロバリゼーションの進路に「無数の断絶」を入れていく必要がある。（本書二〇八頁）

#### 階級の城に立てこもらないこと

組合運動の可能なあり方を新たに考え直すことが必要だろう。再考されるべきは、階級の問題は、人種、ジェンダー、民族、そのほかさまざまな私たちの抑圧との交点上に存在していることを

理解しなければならぬことである。

#### システムの内外で

グラムシが「陣地戦」の構想で主張したように、市民社会のおよぶかぎり広範な諸制度のなかで対抗ヘゲモニーを支える力量を培っていかねばならない。フレイレは、「片足をシステムの内部に、もう一方の足をその外に」と勧告している。システムが下す命令を、自己のアジェンダに照らして、再解釈することだ。

#### 成人教育に携わる教育者たち

教育者の仕事は、文化が学習者によって批判的に検討されるように、手がかりを投じてファシリテートすることだ。これによって、コモンスenseはグッドセンスに変わっていく。

#### 学びの解きほぐしと編み直し

成人教育従事者も、成人学習者との接触をとおして、理論的理解をたえず修正していく。グラムシの知識人がそうである。再学習 *relearn* される、というよりも、*unlearn* (洗い直) されるのだ。成人教育者は「自由への恐怖」に対処しなければならぬ。創造的であろうとするあらゆる試みを、勝手のわからない異世界への無謀な旅として斥ける心性のことだ。学習者はこの心性によって学びに抵抗することもある。このため、「暗記テスト型」の学習に先祖がえりすることにもなりかねない。もう一つは、妥協、対立を解消して馴れ合うことである。学習者は、システムのなかで「うまくやっていく」手段として履修していくこともあるのだ。したがって、学習者に譲歩しなければならぬこともある。生活費が高騰し、副業で働くことを余儀なくされる。このため、学習者は、厳しい訓練を期待するのだ。競争に生き残るために。変革

よりも生き残らねばならない。こうした脈絡のなかで、しかし、変革の刃を研ぎ澄まし、そんな教育の要求の厳しさに耐える力に身に着ける努力を失ってはならない。批判のまなざしは対抗ヘゲモニーの言説にも向けられなければならない。つまり、教育者は、学習者の放つ挑戦の矢が自分のほうに飛んできかねない状況をつくりだしていくことが求められる。

#### 文化とハビトウス

教育者が、学習者のそれとは無縁な「文化資本」を伝家の宝刀としてもちだしたとたんに、それは馴化の行動に墮してしまふ。ここで、文化資本と呼んでいるのは、ある特定の社会的地位を反映した文化的価値体系と「趣味の文法」のことだ。労働者階級の人々が学習者であるのに、教育者が、ブルジョア文化に依拠して授業を進めてしまふことがある。グラムシが民衆大学を批判した理由は、ここにあった。学習者が別な文化と人生経験をふまえてそこにいるのに、そのことが無視されてしまふのだ。伝統的な「ブルジョア」教育者が、そのハビトウスを脱いで捨てるのはきわめて困難だろう。望まれるのは、教育者の側が学習者のそれとは異なる自分自身の性、人種、階級を自覚的に認知することではないだろうか。その結果として、自らの特権的な視座は *unlearn* (洗い直) されることになる。

#### 文化生産

フレイレは、民衆文化を意識化のプロセスの足場として活用しようとしたが、グラムシには、文化の民衆的な形態をとくにとりあげて本格的に分析した著作はない。

#### カルチュラル・スタディーズ

正当性を承認されている文化と民衆文化の両方を包括的に、それぞれを求心的に分析するカルチュラルスタディーズの必要性をうったえたい。検証によると、民衆文化と上位文化の分け方そのものが疑わしい。シェークスピアの場合、その作品を「上位文化」として箔づけする伝統は、当のシェークスピアの時代のものではなく、ずっと後代に発するものであった。高級なものや民衆的なものをのっけから区別だてする定説を疑うならば、サバルタン諸集団は、それらの作品の両方を自分たちの目的に照らして批判的に活かしていくことができるようになる。意味はたんにテキストのなかにだけあるのではない、ということである。教材の媒介者として、教育者は重要な役割を演ずる。学習者は、自らの階級、人種、ジェンダーの経験をもそこに投じて教材を読みこんでいくのであって、だからしてそこで体験される教育の意味は、学習者である彼ら・彼女らによって能動的に構築されることになる。テキストから立ちあがる意味は一つではない。学習者が「教えられたこと」をもとにして多義的な意味を自ら構築し、それが自由に交換され、組み換えられ、再構築されるのだ。このような読みの意味を成人教育も考慮すべきである。

マクロレベルの歴史の強調は、フレイレには見られない。彼が報告する事例をみるかぎりでは、文化サークルで重点的に論じられているのは、現代である。しかし、フレイレ教育学を歴史的文脈で考えようとする研究もみられる。

#### 集団の歴史の回復

実際にどうするか。自分たちの学校体験を思いおこすことである。歴史教育の分野でグラムシとフレイレの思想を接合するということは、学習者の集団的経験を呼びおこし、それを討議・検討する歴史研究のマクロな知見とつきあわせるという現実の作業をとまなう。その過程で歴史の出来事は、しばしばそれまでとは異なる視点から一すなわち体制に抗う人びとのパースペクティブから、とらえ直されることになるだろう。

#### 実践例

本章は、グラムシとフレイレの思想を仲立ちにして、ラディカルの成人教育のためのフレームづくりの試みである。二人の思想の相補性と今日におけるその限界性を念頭におきながら、ラディカルな成人教育の基礎たりうる要素を探ろうとした。

#### 結語

教育内容を固定した知識として伝達するのではなく、問いにさらして編み直す場として存在しなければならぬ。刻々と潮位を高める下層文化が、堅固で同質的といわれてきた支配文化の形式と慣行の防波堤に押しよせ、陸地に浸透することによって現出する、それは境界域なのだ。グラムシを越えて進むことが必要である。彼のヨーロッパ中心主義と、フレイレにも共通してみられる

#### インクルーシブなプログラム

教育内容を固定した知識として伝達するのではなく、問いにさらして編み直す場として存在しなければならぬ。刻々と潮位を高める下層文化が、堅固で同質的といわれてきた支配文化の形式と慣行の防波堤に押しよせ、陸地に浸透することによって現出する、それは境界域なのだ。グラムシを越えて進むことが必要である。彼のヨーロッパ中心主義と、フレイレにも共通してみられる

## おわりに

「グラムシとフレイレの教育思想を基本にして変革志向型成人教育の理論的なフレームを構築することはできないものだろうか」その問いに導かれて、私（著者メイヨ）は本書を書いた。それらが現代の実践にどのような意味をもちうるのかを問いながら、私は二人の思想を整理してみた。」本書末尾部分（二八四頁）にこう書かれている。

グラムシとフレイレの接合には納得がいくが、その結び目が「成人教育」ということに興味を持った。訳者の里見氏も「訳者あとがき」で原テキストの題名に触れて、「成人教育をどう理解したらよいのでしょうか？」と問う。氏によれば、成人教育の歴史には二つの流れがある。1、は子どもの学校教育の代替、継続としての成人教育、つまり制度としての成人教育である。しかし、もう一つの流れが本書とかわるものである。2、それは「基本的に知的解放と政治参加を志向する民衆の欲求に根ざして生まれたボランタリーな運動としての成人教育で国家の主導で制度化されたものではない。その例として、イギリスの労働者教育協会や大学拡張運動、フランスの民衆大学、北欧のフォルケホイスコーレなどがあげられる。イタリアの民衆大学にたいしてグラムシは著しく批判的であった。しかし、革命家として労働者の教育に精力を傾けたのは当然であった。とりわけ、グラムシは『工場評議会運動を生産における社会主義的な関係性を培う教育機関』と考えており、それはとりもなおさず『社会主義国家の先行形態』たるべきものであると受けとめていた」（本書二二頁、傍点引用）

世界「識字」について実に感動的な話をされた。名状し難い感動を与えられたことを思いだす。前掲大沢書は当時氏から贈られた書である。久し振りに読みかえして、感動の記憶が甦った。筆者が神奈川大を去ってから交流が途絶えたが、氏が里見氏の友人であること、しかも二〇〇八年一月二四日、六二歳の生涯を閉じたことを前掲里見書で知った。筆者にとつて痛恨の極みである。今後とも里見氏の著作を読み、大沢氏の実践記録を丹念に検証して、筆者自らの、フレイレの思想、「識字」を描き出し、グラムシとの比較研究を続けたい。これによって遅ればせながら大沢氏のご教示に応え、泉下の先達の貴重な業績を筆者なりに継承して追悼に代えるほか術はない。この覚悟を哀切の念を込めて記し、追記とする。なお、前掲ポルトガル版の邦訳、フレイレ『被抑圧者の教育学』（三砂ちづる訳、亜紀書房）については、東京グラムシ会機関誌、『未来都市』第六四号所収の筆者による書評を参照されたい。二〇一五・六・五

●なお、邦訳『グラムシとフレイレ』は、四六判、二九三ページ、定価四、五〇〇円。著者メイヨは、一九五五年、地中海のマルタ島（旧英領、現在は共和国）生まれ。マルタ大学、ロンドン大学で教育学を学ぶ。マルタ大学で教育社会学、成人教育学を講じている。

者）という一文は注目される。グラムシはたんなる啓蒙ではなく、未来社会の形成を教育（成人教育）と捉えていたのである。

筆者（黒沢）の場合は、戦後日本の最大の労働争議「三井三池闘争における学習活動である。誠首を人間の疎外（窮乏）と捉え、そこからの解放のために学び（教育）を重視し、闘いながら学び、学びながら闘った。そこには、たんなる首切り反対（「反合理化闘争」といわれた）だけではなく、人間変革による、未来社会「社会主義社会」が展望されていた。筆者は「労働者の自己教育運動」と呼んだが、内容は本書の「成人教育」と同じである（当時の教育、社会教育界ではこの呼称が一般的であった）。

その意味で、本書に興味を抱いた。フレイレは一時日本の成人教育（社会教育）界で関心を呼び、流行した。筆者は関心を持ちつつも主題的に研究したことはない。本書であらためて、とりわけグラムシとの関連で学びたい、そう考えて本稿に取り組んだ。

## 追記

本稿作成のために、フレイレ『被抑圧者の教育学』（三砂ちづる訳、亜紀書房、因みに同書はポルトガル語版の直訳である。かつて読んだ英訳からの重訳とは異なる面が多いことを里見氏は指摘している）、里見実『フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』（太郎次郎社エディタス）、大沢敏郎『生きなおす、ことば書くことのちから 横浜寿町から』（太郎次郎社エディタス）を読んだ。かつて、里見氏、大沢氏とは交流の機会があり、多くの教えを受けた。とくに大沢氏には筆者が神奈川大学に在職中に、何度か大学にきていただき学生に講義をしてもらった。筆者の未知の

# LA CITTÀ FUTURA

(未来都市)

東京グラムシ会  
会報 第64号

を読もう！

(2015年8月30日発行)

定価：1部700円（送料込み）

編集：『未来都市』編集委員会

注文：

東京グラムシ会事務局

〒101-0065

東京都千代田区西神田1-3-6 山本ビル5F

TEL 03-5244-5433

FAX 03-5244-5434

E-mail [irispubli@jewel.ocn.ne.jp](mailto:irispubli@jewel.ocn.ne.jp)

URL <http://gramsci-tokyo.com>

## 目次

- ☆アントニオ・グラムシ  
第7ノート（1930-1931）  
哲学メモ。唯物論と観念論 第2シリーズ（下）  
小原耕一・訳……1
- ☆アントニオ・グラムシ  
リソルジメント関連草稿《その5》  
IV 都市と農村、北部と南部  
東京グラムシ会『獄中ノート』研究会訳……14
- ☆ Book Review  
パウロ・フレイレ著・三砂ちづる訳  
『被抑圧者の教育学』（亜紀書房、2011年）を読む  
里見実パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』を読むを参考にして  
黒沢惟昭……18



### 第三部 研究会よりのお知らせ

## 会則と参加よびかけ

#### 中村丈夫記念・歴史と主体研究会 会則

##### 第一条(趣旨・目的)

この会は、「中村丈夫記念・歴史と主体研究会」と称し、新左翼運動の牽引者であった故中村丈夫氏の永年にわたる各種論稿を改めて読み直し、中村丈夫氏の方法や理論を明らかにするとともに、その意義や到達点およびその発展方向等を検討し、もって日本変革運動の総括を明らかにしていくことを目的とする。

##### 第二条(会員と事務所)

この会は、この会の趣旨と目的に賛同する者をもって構成する。

この会は、事務所をフェニックス社(東京都江東区東陽1-19-19 松美荘B・103)に置く。

##### 第三条(役員)

この会に、顧問、代表、編集、会計の役員を置く。

##### 第四条(会の活動)

のが予感されます。

それだけに、より多くの方々の、それぞれの理論的あるいは実践的な経験や関心を集めていきたいと考えています。それら今後の研究活動の貴重な基礎としながら、所期の活動を推進していきたいものと考えています。中村氏の論稿と足跡を共通の素材としつつ、変革運動の「歴史と主体」の発展方向を探る——この趣旨にご賛同・ご協力していただける方々に、研究会は幅広く参加を呼びかけたいと思います。

会員としての活動は、「会誌」への寄稿がもつとも望まれるとしても、それに限られるわけではありません。「会誌」の購読や掲載稿への論評、「懇話会」への出席、その他、随意随時の参加が会員の活動ということになります。

したがって、会費についてもとくに定めず、運営に要する経費は、「会誌」や中村氏の「遺稿集」など著作書籍の売上げや、支援者、支援団体の方々からの御厚志などをもって賄うこととされています。

とくに、本誌を読まれたみなさまには、研究会へのご参加をぜひ検討いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

二〇一五・九・一四

- この会は、第一条の目的を達成するため、次の活動を行なう。
- ①「中村丈夫遺稿集(データベース)」の普及
  - ②会誌の発行
  - ③懇話会の開催
  - ④その他、第一条の目的のための活動

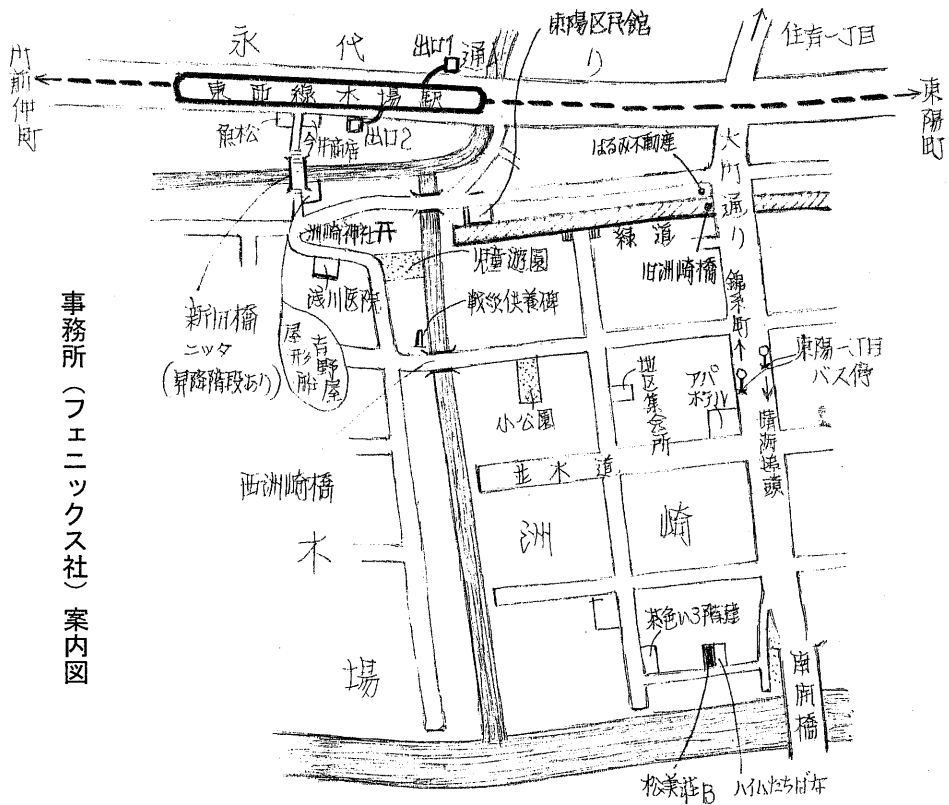
##### 附則

この会則は二〇一五年三月一五日から発効する。

#### 研究会への「参加を！」

本研究会は今年三月一五日、右記の「会則」を定めて発足しました。以後、会では、まず本誌の創刊に取り組んできました。また、今秋一〇月の第一回懇話会開催に向けての準備も進めています。

この研究会は、第一条の「趣旨・目的」が述べるように、中村氏の論稿を一つの媒介としつつ、変革運動について考究を深めていこうとするものです。しかし、氏の論稿は広範な領域にまたがっていることもあり、どの分野を研究の切り口にするにせよ、「氏の方法や理論」を客観化していく作業等には容易ならぬもの



事務所(フェニックス社)案内図

## 第四部 遺稿覆刻の部

### 『人間と権力』 科学と芸術への提言

中村 関文連 工学院大 (一九六九年 七月六日)

序

科学と芸術への提言ということだが、私は社会科学を学ぶものであっても、自然科学、技術学にはまったく門外漢であり、芸術にいたってはいたって程度の低い素人的鑑賞者にすぎず、芸術学・美学のなんの素養もない。それがあつかましくもおひきうけしたのは、現在の危機的状況のもとで、外目にも、科学と芸術—人間の価値を文化的に代表する—が一面では飛躍的に発展—宇宙規模での科学技術時代や都市美、インダストリアルデザイン……—しつつも他面では深刻な頹廃におちいつており、いわゆる人間疎外からの解放、人間の全体的回復のよりどころというよりも、文字どおりの非人間化の手段に利用されていること、たいし、みなさんとともに対話してみたいからにはかならない。私自身の問題意識からすると、真の意味での科学と芸術—文化の発展の根源には人間の問題があり、しかもこんにちでは人間の問題とは人間と権力との対決、ないしは権力の人間化、人間的な権力形成の問題であり、この点を見失っては、いかに近代科学芸術による人間疎外からの解放と叫んでも後向きな遁走—たんなる近代的人間主義への回帰、つまり小市民的幸福なるものへの逃避—となると考えられる。人間そのものを物象化する日々の機械的

い。もう少しつつこんで考えるために、手がかりとして自然科学と社会科学との差異を考えてみたい。科学方法論上さまざまに論じられているが、質的差異はつぎの点にあると思う。

(二つの点)

それは自然科学の場合、本来のフィジカルな対象—物質—を問題にするとき、われわれはインプリシットに主体と客体とを画然と区別する立場を前提にする。われわれという主体—人間、類としての人間—の立場から非人格的諸対象を交換的にはみずからの意志に従属する手段としてとりあつかう。目的を設定し、対象の諸性質、諸関係をオペレイティブ—操作的に利用しつくす。しかし、社会科学の場合、対象が他の人間、社会的諸関係、諸制度が問題となる場合には、そういう立場を自明の前提とするわけにはいかない。実験計画(工学の場合には基準点)をきめ、それにしたがって特定の目的を必要手法をもって遂行するいわば権力的地位が社会科学の場合にも保障されていたとしても、客体は多かれ少なかれ主体と対等な資格においてあらわれる主人公である。したがって、われわれは主体として目的を設定しその実現をめざそうとすれば、それは客体—他の諸個人の目的でもあるような形式においてしか可能ではない。この問題のなかで、目的は手段とさきりばなされ、手段を超越したものでありえないし、手段の■も一義的に従属的な手段ではない。両者は目的としての手段であり、手段としての目的であるという矛盾にみちたかたちをとる。目的は手段の目的でもあり、任意的恣意的にはきめられない。対象が純粋手段たることは断じてできない。自己目的たるべき人間だからである。もちろんそうは思っていない人もいる。たとえば 経

■的労働生活から人間の共働の本質を芸術活動によって 現

しようとしても、しよせんは日曜大工、日曜園芸的なつかの間の開放感—「文化産業」なるものによるレジャーの擬似主体的消費とそうかわらない—で労働力を再生産して仕事にまたいそむという飼育された生活の自己欺瞞の道具にそれがなりかねない。大学のサークル活動でもそうであろう。こっちが主人公になるところに、■されている客体から主体に飛躍するところに科学が科学となり、芸術が芸術となるゆえんがあるのではないか。ではどうやって? それを考えあうために、時間もかぎられているので、つぎの二点を問題として提起してみたい。

- (一) 人間と科学・芸術
- (二) 人間と権力
- (三) 科学・芸術と革命の問題を考えてもらいたい

(人間と科学)

一 科学の本質、その発展の人間にとつての意味  
科学とは一般的にいって、人間が自然や社会の構造やその運動の法則性を理論的に把握しようとする知的活動であろう。だが、そういつただけではなにひとつあきらかになつたことにはならな

経済学 所得政策 熊谷 「経済発展論」 「資本主義経

済は一部の人がとが早急に断定しているように無政府的生産を意味しないのみならず、むしろいくつかの点ではまさに比類なく卓越したパフォーマンスを実現してきた経済組織であるといつてよいが、多面において、それが重大な欠陥と弊害を露呈してきたことも一般に認められているところである(発展変動にともなう経済的不安定、独占によってひきおこされる資源配分の非効率、所得分配の不満足な状態……) だからその欠陥を是正するためエフィシエンシーとイクイティを目標に経済政策をたてねばならない。どんなに精巧なモデル、数式を展開してもそれは科学ではない。せいぜい社会統制技術、労働運動の粉碎の対象。

政策の必然性、批判の根拠を提供するのが科学

つまり社会科学は対象、手段にたいし一方的にオペレイティブには臨みえず、人間的視点から、つねに対象によって批判的にチェックされ、自己自身を批判的に検討しなくてはならない。

また、社会科学の場合、自然科学の知識の客観性ないし厳密性にたいし、その提供しうる知識がルーズだといわれているが、それはオペレイティブ、アノペレイティブではないという対象の構造、主体—客体の関係によって決定されるものであり、社会科学が非科学的であるからではない。社会を構成する各個人が他の諸個人との関連で手段であり目的であり、すぐれて主体として、自己目的として自己を表現するといういわば多義的な過程的構造が存在するからである。だから社会科学における「法則」とは、そのような不可分な主体—客体(もっといえば社会的現実、高次の物質—社会的人間)にあっては純粋客体は存在しない、主客が分裂さ

せられ、権力によって技術が■手段化、客体化されているだけだ」の運動の法則である。だからたとえば経済学で「鉄の法則」を信奉する経済決定論者は物神崇拜者である。自己疎外現象である。マルクスもレーニンもそのようには考えなかった。

グラムシはいつている、「経済学におけるすべての法則は、ある数の要素をきりはなし、したがって反対にはたらく力を無視することによって得られるもので、傾向的であらざるをえない。おそらく、傾向性の度合の大小を区別しなくてはならないであろう」。これは利潤率の傾向的減法の法則についてのマルクスの考えを展開したものであるが、「傾向的」法則とは非厳密的法則ということではない。

本質的、論理的な傾向的必然性を媒介する偶然性——人間の事実——をもふくみこみうる科学的な包括性、全体性を意味するものとうけとめられる。だから社会科学の体系は本質的には運動にある仮設の体系と考えられ、虚偽意識としてのイデオロギーとは異なる存在物■的観念形態——人間社会の上部構造のひとつ——として、科学の相対的・絶対的眞理性を語るべきだと思う。

以上二点の要点をのべたが、自然科学の場合も、思いきりつこんでいくと、いわゆる科学的な■可能性、厳密性の「現象」の背後にやはり人間の本質がとらえられなくてはならなくなるのではないか？ とくに現代では一九世紀の自然科学の発展が社会思想を一変させたのに比べて、一口に科学技術といわれるように（厳密な連関性を一語でいうには便利な言葉）、むしろ技術に科学が組みこまれていく（コントロールがきかない）印象をうける。科学がつねに技術を媒介として発展してきたことは疑いない（へ

#### 横工大 建築学科

#### 東大 都市工学大学院

そのような科学技術は、本質的には人間と人間との関係であり、人間の活動である。グラムシはいう、「科学もまたひとつの歴史のカテゴリーであり、しかし発展する運動である。（注—仮説構想の不断の過程）。科学の関心の対象は、現実的なものの客観性などではなく、人間である。自分の探求の方法をねりあげ、自分の物質的な道具と、区別・確認のための論理的道具（数学をふくむ）とを、たえず正しくみがきあげる人間である。かれの物質的道具は感覚器官の力をつよめ、かれの論理的道具はすなわち文化、すなわち世界観である。すなわち技術を媒介とする人間と現実との関係である。科学においても人間の外に現実、実在をもとめることは、実在を宗教的、形而上的に理解することでありパラドックスである。人間なくして宇宙の実在になんの意味があるか。すべての科学は人間の必要、人間の生活、人間の活動と結びついている。人間の活動はすべての価値の創造者であり、科学的価値の創造者でもある。……ほんとうは、科学もまたひとつの上部構造、ひとつのイデオロギーである。……科学は科学者のあらゆる努力にもかかわらず、裸の客観的表象として姿をあらわさない。それはつねにイデオロギーの衣をまとってあらわれる。具體的にいえば、客観的事実と、たんなる客観的事実を超越する仮設あるいは仮説の体系との結合が科学なのだ」。

科学Ⅱ眞理の認識（非イデオロギー）、眞理はつねに眞理（■）の■（ではなにも意味しない。かえって科学、技術を非人間化し、■させるものに奉仕する。

ロンの公式、ルネサンス科学——■的技術、砲術、■革命……と応用力学、熱力学、電気力学、化学、地質学、……科学史、科学思想史をみよ。しかしとくにこんにちでは、

① 技術が資本であり、技術が戦争を決定する。世界市場（賃労働—資本）は部門間交換、先進国間交換を中心とし、戦争の性格は政治の延長としてコントロールできなくなった。

② 近代人間主義の成果がそのブルジョアの本質から極限的な人間疎外にまで人間を両極分解——精神（理性）と肉体（感性）との相互媒介的統一者の——させている、という状況から科学が技術化しているといえる。

私は科学が技術より人間的価値で上位にあるなどといったのではない。マンマシンシステム（人間の心理的感情的要素まで技術体系のもとに統合する）まで複雑精巧な体系をうちたてた現代技術を呪うことはナンセンスである。技術—生産技術—は社会的生産力の主要な構成要素であり、それも人間と■特有の属性Ⅱ■的存在と考えるのがフェティシズムである。たしかに技術にのみこまれた科学技術は人間の生きた総体的統一を失わせ、精神と自然とを分裂させている人間を抽象化しているが、科学技術のこのような抽象性は抽象的なるがゆえに悪なのではない。技術、自然科学という人間の活動——人間の活動の総括——をして人間の発展の基本線からずれさせ偏向させている人間関係、社会的関係、権力的関係こそが問われなくてはならない。そのことをまざまざとせしめているのが最近の学生のたたかいであろう。

もちろん、だからといって科学は政治に奉仕するのではない。人間に奉仕する、というより人間の活動、実践としての本質を学問的に実現する——したがって技術の政治への従属を拒否するのではなくてはならない。

してみると科学の発展とはたんに技術の発展ではなく、人間の発展、その基礎、この人間の人間としての全体的回復そのものではなくてはならない。抽象化された科学それ自体の部分的発展が■の発展を■することもありうる。■と■ 筑波大学の例

■サイエンス(科学の■と■)のもとでは、この

ジームそのものに反逆せざるをえない。科学が眞に科学であるかぎりには、人間の本質の■的個性の発現である芸術はもちろんである。

#### （人間と権力）

#### 二 人間の本質、人間の変革

せんなく我田引水になってくるが……

人間の本質とは？ ……アプリオリに理性とか

社会的諸関係の総体 ■化中心 ■ない

非自立的人間 ↓ 主客分離 ↓ 社会的的人間 ↓ 完全な主客分離 ↓ 社会主義的(個人的)

社会的人間 (■) ↓ 社会的的發展Ⅱ階級闘争、権力闘争

権力とは？ 現代権力構造の特徴

■組織化、価値観への■の中核としての文化(科学・芸術)

革命—労働者権力、学生権力

外在的ラジカリズムではなく内在的革命主義—現代革命

平和と民主主義の両極分解—ラジカル化ではなく

■—実践—主体—構造—革命進化—権力

工大サークルが文化サークルとして科学・芸術を發展せしめつつ、發展の基礎的条件をたたくいとる権力闘争の道を追求されんことを祈る。

(編者・注)

・本稿は、『中村丈夫遺稿集』二二九九〜二四一頁に収録。

・中村氏が、講演に際して作成した手書きメモによる。

(テープ起こしではない)

・文中の■は、判読困難な文字(■が一文字とは限らない)。

・本稿タイトル部は、中村氏の表記どおり。

### クラウゼヴィッツの洞察

—中村丈夫氏軍事論集—

A5判 並製三三三頁 フェニックス社扱い  
定価二、八〇〇円を二、〇〇〇円にて  
中村丈夫氏軍事論集刊行委員会編

中村丈夫氏は小山弘健氏を継ぐわが国左翼軍事学の泰斗でもある。クラウゼヴィッツ研究を中軸としつつ、その視野はまことに広大であった。五章を設けてその全容を明らかにする。軍事思想史、海軍兵学、日本内戦史、叛軍闘争論、さらには革命軍事論と、その展開を見のがすことはできない。

- 第1章 近代軍事思想の形成とクラウゼヴィッツ
- 第2章 クラウゼヴィッツと近代軍事学の論点
- 第3章 日本内戦史と国民的な軍事問題
- 第4章 戦争、軍事に関わる法理と人権
- 第5章 現代における軍事情勢、軍事問題
- 補論 小山広義兵学の遺産／現代革命と軍事問題

### 編集後記

◆今年の三月一五日、中村丈夫記念・歴史と主体研究会は発起の会を開いてスタートした。会場は飯田橋駅よりほど近い喫茶ルノアール会議室であった。結集は一〇名とささやかな出発であったが、以来六カ月余、ようやく研究誌を創刊、それをもとに一〇月懇話会を持つとしている。本号がそのよいタタキ台となることを念じたい。

◆本誌の財政規模もあり、研究論文の部は五点が精一杯であった。本来入稿いただくべき方が、他に四〜五名はいる。その方々は次号という形になり、まことに申し訳ない次第である。一言お詫び申し上げたい。

◆研究論文の末尾の特別寄稿「対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育」をよせられた黒沢惟昭氏には、厚く感謝申し上げます。グラムシの工場評議会運動の精神こそは獄中時代をも貫いて息づくものというのが、中村丈夫氏の考え方であった。その不可欠の一面をなぞる好論評といえよう。

◆第IV部の覆刻で取り上げた「人間と権力」は、中村氏遺稿の中では異色の講演である。黒四角の伏字が出てくることは残念である

が、無理をして読み込むことはしない方針をとった。講演のための中村氏の走り書き的メモであり、事後にテープ起こしをしたものではない。工学院大学のサークル組織との関係については、まったくわからない。六九年当時、中村氏は乞われるまま様々な大学に向いて講演を行っていた。

◆本研究会には、大きく二つの道がある。一つは、中村丈夫氏遺稿の読み直しに徹し、その蓄積を現代へと甦えらせる道、もう一つは、中村氏の方法のいくぶんかの自得をもとに、現代的変革の理論へと突き進む道

である。この双方は不可分ともいえるが、結局は後者の成果こそが問われることは、いうまでもないだろう。寄稿者のみなさんが奔放に考究して、労作を寄せられることを大いに期待したい。

◆それにしても、本誌が研究誌を標榜するものの、年一回刊でしかないという限界を考えると、まことに忸怩たるものがある。この発行間隔の問題はなかなか挽回できないが、できることなら一号当たりのページ数をもう少し増やしたい。読者、会員各位の工夫を要請したい。

■本誌購入および日常連絡について  
フェニックス社へ郵便でご連絡下さい。同社には専従者がおりませんので、電話/ファックスでご連絡の方は、編集窓口・前田 ☎ / fax03 (3312) 4803 をご利用下さい。ご注文に対しては現品を必要部数先送します(送料当方負担)。同封の郵便振替用紙にてお支払い下さい(手数料ご負担を)。東京・新宿二丁目の模索舎にても扱っています。

研究誌 (年1回刊)  
**歴史と主体——中村丈夫研究**  
 第1号 (創刊号)

---

編集/発行 中村丈夫記念・歴史と主体研究会  
 発行人 大石和雄  
 発行日 2015年9月30日  
 発行所 フェニックス社  
 〒135-0016 東京都江東区東陽1-19-19  
 松美荘B103  
 振替 00180-3-29605

---

定 価 400円

# 紙碑 中村丈夫

四六期上製カバ

## 共産党から新左翼への70年

中村丈夫追悼  
集刊行会編

定価二、四〇〇円十税  
全国有名書店で発売  
彩流社刊

中村丈夫追悼集刊行会では、一部一、五〇〇円の特別割引で当分販売します。注文は刊行会窓口(〒166-0001 杉並区梅里2-13-10 前田浩志 TEL/FAX 03-331-24803) かフェニックス社へ

### 紙碑 中村丈夫 目次

まえがき (中村長政)

第一章 八七年の軌跡に想う

第一節 兄を語る (中村長政) 8

第二節 戦後のことども (金井敏博) 32

第三節 社革から社労同の頃 (小塚尚男) 57

第四節 青共委の時代と中村さん (大石和雄) 64

第二章 中村丈夫さんを偲ぶ

第一節 中村さんの理論的貢献

・中村さんと私とグラムシ (上村忠男) / 補論・グラムシの工場評議会理論 92

・中村丈夫軍事学研究の意義 (山崎カヲル) 102

・中村丈夫さん追憶——グラムシと軍事研究への回廊—— (鈴木正) 108

・兵士人権、革命的抵抗権の理論化——兵士人権研究会における中村丈夫氏の理論的「格闘」—— (吉川純) 110

第二節 中村さんへの追憶

・追憶詩——コラボレーション (山中泰容) 116

・伯父——中村丈夫氏の思い出 (三森義道) 125 120 116

・グラムシ研究の先達を想う (丸山茂樹) 129

・労働組合運動の初心を得る (設楽清嗣) 131

・不肖の弟子として (入江勝通) 134

・革命家中村丈夫先生を偲ぶ (佐藤秋雄) 136

・中村丈夫さんとのこと (酒井亨七) 142

・「社労同通信」——新左翼「のこと」 (種橋保彦) 140

・四〇年の組織生活の中で (大石和雄) 146

・孤独な闘いを終えて (菱野孝) 149

・「鹿野社」の由来 (松岡利康) 151

・横浜駅のホームにて (高橋健) 152

・八〇年代の「インバクシオン」とともに (深田卓)

第三章 警咳に接して知る——思想・実践の人格的統一 (川音勉) 154

・蓮華田の想い (前田浩志) 156

・理論的業績のあらまし (前田浩志)

第一節 あらましのあらまし (前田浩志)

第二節 経済学的領域のあらまし (作業クルーズ)

第三節 「資本論」の方法 165

第四節 経済政策論 168

第五節 農業問題論 173 168

第六節 日本資本主義・帝國主義論 177

第七節 資本主義長波論・コンドラチエフ研究 180

第八節 グローバル資本主義論 184

第九節 共産主義運動理論のあらまし (作業クルーズ)

第三節 共産主義運動史研究 188

第四節 網領的レベル 193

第五節 共産主義運動史研究 197

第六節 戦略戦術、革命論 200

第七節 汎労働理論 204

第八節 組織論 208

第九節 哲学的レベル 213

第四章 資料編

第一節 活動年譜 (作成・莊司良樹)

第二節 広義構造改革派の組織系統 (図)

第三節 中村丈夫氏書誌 (目録・小委員等)

第四節 成書一覧 234

第五節 目録と文書庫 244

あとがき (前田浩志) 247

激動の20世紀をひたすら駆け抜けた稀有の人を見よ!

データベース (USBメモリ)

# 中村丈夫遺稿集

編集・中村丈夫遺稿集作成委員会 (代表・大石和雄)

**頒価2,000円にて好評発売中!**  
**論稿181点 (全874頁, 18分類) を収容**

2007年に亡くなった中村丈夫は、新左翼運動の牽引者として闘い抜いた人である。経済学をはじめ、政治学(グラムシ研究)、軍事学の各分野に通じたその鋭い論考は、今日の状況に対してもなお多くの示唆を与えている。

この『遺稿集』は、敗戦直後に執筆した農民運動への論及から始まり、その後、新左翼運動に投じた1960年代半ばから、病いに伏す直前1996年までの、彼が重ねた思索を文字化した各種論稿——新聞雑誌や政治団体の機関紙誌に寄稿した論文、また研究会や集会での講演などのために用意したレジюме、メモ、さらに講演録など——を網羅している。

●収録論稿の分類 ([ ]は論稿の点数)

1 資本論	[1]	10 戦略戦術	[27]
2 経済学	[6]	11 汎労働論	[5]
3 農業問題	[4]	12 組織論	[3]
4 日本国家	[13]	13 哲学	[2]
5 帝国主義	[8]	14 ポーランド「連帯」運動	[6]
6 長波論	[22]	15 沖縄闘争	[12]
7 グローバル資本主義	[2]	16 労働運動	[8]
8 綱領的レベル	[27]	17 秩父蜂起	[1]
9 共産主義運動史	[25]	18 軍事	[9]

☆ご購入の申し込みは、次の事務所または連絡先に、郵便または電話/FAXによりお願いします。

◆〒135-0016 東京都江東区東陽1-19-19 松美荘B-103 フェニックス社

◆(電話/FAX)〒166-0011 東京都杉並区梅里2-13-10 前田浩志 Tel/Fax 03-3312-4803  
現品を先送り(送料当方負担)します。同封の郵便振替用紙にてご支払い下さい(手数料ご負担願います)。

なお、東京・新宿二丁目「模索舎」(<http://www.mosakusha.com/newitems/>)でも扱っています。

定価 400円